Wasteful grace is moderate and bring up environment and a human being

もったいない・おかげさま・ほどほどに、が環境と人間を育てる

M・O・H通信

もう

M·O·H communication

19号
2008
Spring

特集：滋賀の明日
「地域における役割」

M·O·H通信 19号 特集：滋賀の明日「地域における役割」 2008 Spring

Vol.19
2008 Spring

contents

目次

特集「滋賀の明日」

M・O・H対談 既得権の放棄は自分の損？ 固執すれば未来はどうなる？
氾濫する「既得権」―日本の社会は変われるのか？ 曽我 直弘＆森 建司……5

M・O・Hレポート―1 未来の私を描いてみよう
19才が創る持続可能社会の新物語 滋賀県立大学環境社会計画専攻 鵜飼 修……13

フォトレポート 古民家暮らし体験ツアー
湖北の魅力再発見 奥貫 隆……23

ショート・ショート
ふれあい 第九回『がんばれ!!』 中井 一三雄……29

M・O・Hレポート―2
滋賀・湖北地域での暮らし体験レポート 亀山 芳香……30

M・O・Hレポート―3 湖北古民家再生ネットワーク～
地域の記憶とつながる住まい 清水 安治……33

M・O・Hレポート―4 抱きしめて BIWAKO」20周年記念事業
手と手がつながった日 今関 信子……37
あの優しさをもう一度 ……40

M・O・Hレポート―5 びわ湖プロジェクトフォーラム『第一弾 森が動く！』基調講演より
森と企業をつなぐ「森の町内会」 半谷 栄寿……43

表紙写真：
滋賀県立大学の南、
野田沼公園から見る夕陽

西の湖の葦焼き（3月）

「山の話あれこれ」（漫画）オノ ミユキ……53
もったいない学会便り ……55
第1回環人会現場勉強会 ……57
胎教 畑 裕子……81
〈ドイツだより―7〉
アウグスブルグから 原 修子……63
〈商家の家訓の話 第五回〉
矢尾喜兵衛の所感（三） 末永 國紀……65
MOH-ECOTOURISM―8
ツーリズム最前線―高島トレイルへの期待
檀上 俊雄……67
講演日記 ……70
セツブンソウ 三山 元暎……71
本の紹介 ……72
「人間の学」（森信三先生著）を読む その二
井上 昌幸……73
読者からのお便り ……75
アラスカ便り 福田 正己……76
MOH通信概要 ……77
MOHニュース ……78

お知らせ

賞状が届きました

1月27日（日）ピアザ淡海で開催された、「第三回たたえあう交流会」に出展しました。滋賀県政策調整部企画調整課の主催によるものです。参加団体は過去最高の42団体。大賞は、沖田条理語り部会が受賞されました。

このほど、『まるエコもったいない賞』＝写真＝が届きました。これは受賞者以外の参加団体に贈られたものです。

滋賀の明日

■特集：滋賀の明日 ― 地域における役割

『転換力』

誰でも学生時代に社会規範を守って生きるように教育をされている。更に就職をすると大抵の職場では「わが社の社員はかくあるべし」という事を一層厳しく叩き込まれる。これは職場の大小を問わず、職種を問わず、技能や経験の蓄積と並んで、在籍中はその人を拘束することになる。管理職になれば「管理職はかくあるべし」となるし、経営層に入っても「経営者はかくあるべし」がついて回る。これがそれぞれの社会のルールであり倫理というものだろう。

私も就職をして新入社員時代からこのルールの中で、曲がりなりにも生涯のほとんどを生きてきた。そして後輩を対象に、「会社人間」養成のための指導等もしてきた。

ところが、企業ＯＢになって第二の人生に足を踏み入れ、神社やお寺のお世話や、老人仲間との付き合い、自治会の運営、あるいは志に共鳴して入ったＮＰＯ活動などの世界で生きてみると、経済社会や、それを支える「会社人間」の倫理やルールとかなりの隔たりがあることに気づかされた。当然、それぞれの社会のありようが異なるので、それによって違うのは当たり前でのことであるが、過去生きてきた社会のルールや倫理観を、いつまでもぶら下げていると、その違和感にかなり悩まされることになる。違う価値観の中で自分がどのようにして生きていけばよいのか、疑問に思うところまで追い込まれることにもなる。

それを解決するには、過去の判断基準と違った別種の基準を受け入れることの、決心と努力、あるいは、そこに到る『転換力』が求められるのではなかろうか。

われわれは企業の右肩上がりの業績向上や、企業間競争で勝つ事を使命とし、その実現のための効率アップ、コストダウン、マーケティングなどの戦略戦術を考え実行する事が当然の活動規範であった。環境問題を考えるとき、その「会社人間」の倫理観を１８０度転換しなければならない事を、今ではほとんどの人が気づいている。

過去の価値観や、倫理観にとらわれて抜け切れない「過去の会社人間たち」は、次なる社会から抹殺される恐れがある。速やかに持続可能型社会に生き、貢献していくために新しい価値観、倫理観を受け入れる体勢をとるべきなのだ。

その能力は、あなたに、その『転換力』があるか無いかにかかっていると思う。

（森　建司）

●対談 **曽我　直弘 vs 森　建司**

滋賀県立大学 学長

循環型社会システム研究所 代表

〈滋賀の明日 ― ① 日本の社会は変われるのか〉

Can the Japanese society change?

氾濫する「既得権」―日本の社会は変われるのか?

既得権の放棄は自分の損？固執すれば未来はどうなる？

地球環境問題への取り組みは、現在のスピードで果たして良いのでしょうか?　日本の社会において、そのハードルの一因となっているのは、『既得権』の意識だと主張される滋賀県立大学学長の曽我直弘先生に、森代表がお話を伺いました。

■滋賀県立大学（彦根市八坂町）
■2007年12月5日

日本は「閉鎖的」に物事の解決を図ろうとしているのではないか？

森　MOH通信の対談の中で、私が先生方にいつもお聞きするのは、地球環境問題について、我々は今、どの段階にいるのかということと、状況を改善するために何をすべきかという二点についてです。曽我先生はどのようにお考えですか。

曽我　私としては、もう手遅れの状況にあるというのが、今、現在の日本の姿ではないかという気がします。日本では経済にしろ、教育にしろ、一度下り坂になるとなかなか軌道修正ができません。環境問題もそれと同じで、とことんまで（悪い方向へ）行ってしまう可能性があるのではないか。そしてそれが、日本人の悪いところだろうと思っています。

森　それは日本人の民族性という意味でしょうか。

曽我　一言で言うなら「閉鎖的」だということです。例えば、日本の高校生の学力低下が最近のニュースで報じられました。しかし、一方で、日本は国をあげて「科学技術創造立国」をめざしています。政府は、この二つの事柄の共通解となるような改善・推進策を模索しなければならないわけで、選択肢を設けて、どの案を選択すべきかと、そういう討論が行われれば良いのですが、現実には反対派は反対意見しか言わないという状況です。また、環境問題にしても、二酸化炭素のキャップ・アンド・トレードが国外では活発化していますが、日本の場合はそれを同業者だとか、関連グループの中だけで考えますね。異業者とキャップ・アンド・トレード（排出権取引の一方式）をするということがなかなかできない。どちらにも言えるのは、非常に閉鎖的に物事を解決しようとして、その結果、閉塞された状況に陥り、足踏みしてしまっているということではないでしょうか。

森　なるほど。教育問題はさておき、環境問題について私が申し上げたいのは、足踏みする以前に、企業は根本的な問題を棚上げしているのではないかということです。例えば自分の会社の製品について、製造工程で二酸化炭素の排出量削減に取り組んでいるのは良いとして、その製品が使われている間は二酸化炭素は排出され続けるのです。それにも関わらず、増産体制を維持強化しようとしている。それでは製造工程でいくら排出量を削減しても、帳消しになってしまう。製造量そのものを減らしていくという方向性も視野に入れなければ、地球温暖化問題に貢献しているとは言えないのではないか、そう思うのですが。

曽我　ただ私は二酸化炭素の排出量について、すべてを企業に押し付けるのはどうかと思います。先ほど「選択」と言いましたが、我々一般市民こそ、何を選択するかという視点を養うべきではないでしょうか。例えば新車を購入する際も、日本だと外車の方がステイタスが高いと思う人はまだまだ多いでしょう。しかしアメリカだと、具体的に言いますが、プリウスに乗ることが社会的ステイタスが高いのだということが普及しています。その違いではないでしょうか。

もう一つ例を上げるならば、キッチンのシンクにしても日本では過去にダブルシンクが流行った時期もありましたが、今は大型シンクが人気ですね。

森　ああ、ダブルシンクだと片方で洗剤を使って、片方で流してと使えますが、今は水を流しっぱなしにして使うタイプが多いかもしれませんね。

曽我　そうなんです。しかし、アメリカやドイツの国々ですと、水は高いという感覚がありますから、おのずと節水型のシンクが市場の主流になるわけです。

森　環境に対する生活者の視点について、私は昔と随分違ってきたという実感もあるのですが、しかし、それが政治にも、企業の物づくりにも、まだまだ反映されていないということでしょう。逆にそれは、背後に企業の思惑があるせいではないでしょうか。使い捨てが美徳だと考える人は少なくなったと思いますが、使い捨てはやめましょう、長持ちさせましょうといったコマーシャルは、企業的にあり得ませんから（笑）。

一度手にした「既得権」は、手放し難いという現実

森　今、食の「地産地消」など持続可能な社会づくりに向けた取り組みが唱えられる中、私も地元商店街の復活を期待しているんです。しかし、これを提唱するのはリスクが高いことで、大型スーパーは潰れろと言うのかと、お叱りを受ける覚悟も要ります。私としては、この点においても、激戦の時代がやって来るのではないかと思っているのですが、先生はこうした環境倫理的な啓発活動をどのように評価されますか。

曽我　考え方としては賛成ですし、社会的にも評価されて然りだと思います。しかし、世の中の動きは、そちら側には向かっていないというのが現実でしょう。やはり消費者として一度得たもの、選択や便利さという「既得権」は、外し難いんです。スーパーに行けば、ほぼどんな魚でも選ぶことができます。でも、小さな商店だと今日はブリだと、それに耐えられるか否かですよ。

森　そうなんです。コンビニでお弁当を買うにも、あまりに選択肢が用意されすぎているでしょう。ですから私は、逆に単品で今日はこのお弁当だよと、そういうお店で買い物をすることが社

環境科学部、工学部、人間文化学部、人間看護学部、国際教育センターを擁する滋賀県立大学

観念や思想を形成する教育が望まれます

会的に評価される世の中になって欲しいと思うのです。

曽我　それは教育の問題として、そういう評価ができるように自身の観念や思想が形成されている人が、育っていることが必要だろうと思います。自分が何を選ぶのか、そのバックボーンたるものを教えるプロセスが、今の教育現場にはあまりないんですよ。それにはやはり、日本人の『出る杭は打たれる』ということが無くならないと、そういう判断ができる人間にはならないだろうし、ひいては男女雇用差別など様々な社会的差別の問題解消にもつながらないのではないかと思います。

森　今の教育の在り方では、自己を確立するのが難しいということでしょうか。

曽我　ええ、既得権が溢れているだけに、かえって困難を誘っていると思いますね。ですから私は、文部科学省が何千人の教員増と言っていますが、どういった教員を増やすのか、本当に日本の将来を危ぶむのであれば、教育大国のフィンランドのように、理系の学士を持った人材を増やすのが望ましいと思います。

きちんと理科が教えられる先生ですね。そして、教科書を使って読み聞かせを行うにも、例えば物語の中の善と悪は、見方を変えれば善が悪になり、悪が善になりと、違った解釈ができるかもしれない。そういう物事の見方を教える必要があると思います。「多様性」というのは、このようなプロセスの中で育つわけで、その点、日本では「対話型」の教育が不足していると言えるのではないでしょうか。

地球環境問題に経済的な実感と長期的なスパンを持つ

森　多様性、対話型、これは教育のみならず、地球環境問題を考える上でも、重要なキーワードであろうと思います。教育問題と同様、先生は地球環境問題、ひいては持続可能な社会づくりのために、今一番に何をなすべきだとお考えですか。

曽我　私たち一般市民においては、持続可能な社会を築く過程で、今の生活から少し苦しくなるということを、容認しなくてはいけないと思います。こう言うと社会から叩かれるかもしれませんが、現状維持のまま未来の社会づくりというのは不可能ではないでしょうか。将来のための投資と考え、長期的な損得のスパンを持たなければと思います。

森　損得のスパンですか。

曽我　ええ。残念ながら、地球環境問題のために頭でこれは良いと考えても、それを実践・継続していこうという社会基盤がこの国から失われてしまっているのです。例えばチャリティーにしろ、日本人はあまり寄付をしませんね（笑）。個人的な損得に皆が染まってしまっているのです。だとすれば、個人にも損得が実感できる年月、例えば太陽光発電なら2年といわずに何年後に元がとれるというような考え方の施策が必要かと思います。

長期的な生活設計を身につけてほしい

森　確かに現実と照らし合わせれば、そういった施策が必要かもしれませんね。しかしながら、県立大学の卒業生の中にも、持続可能という志をもって、新しい時代に立ち向かおうとする人材が現れ始めました。お金は儲からないかもしれませんが、彼らには誇りがあると、私はそう感じているのです。やはり環境科学部というユニークな学部

地域で活躍する人材に期待しています

があるからこそ、そういった人材が輩出されたのでしょうか。

曽我　本学の場合、「地域に入る」ということを当たり前だと思っておられる先生方が非常に多いのです。ですから、学生たちにとって先生方は、地域に根ざし、学び、貢献するきっかけであるとともに、モデルでもあるのです。そうした中で学ぶうちに、何か自分の将来的なビジョンを描くのではないかと思っています。

森　滋賀県でも持続可能な社会の実現に向けた様々な取り組みが進められていますが、私はその中核組織の役割を、滋賀県立大学に担っていただきたいと望んでいるのです。なぜなら、環境科学部にしろ、人間文化学部にしろ、県立大学ほど時流に即した総合的な学問体系を擁しておられる機関は、県内に他に無いと思うからです。そして、これほど地域に密着した大学も珍しい（笑）。今後も、地域の中で活躍してくれる若い世代の出現を心待ちにしています。本日はどうもありがとうございました。

社会のための学術

曽我直弘

●そが　なおひろ＝1934年、大阪生まれ。京都大学大学院工学研究科工業化学専攻博士課程修了。工学博士。専門は無機材料科学。
主な著書／「初級セラミックス学」「無機ファイン材料の化学」「材料科学と分野融合」「産学連携とその将来」ほか多数。

勇気凛々
心の壁を打ち破れ

森建司

●もり　けんじ＝1936年、滋賀生まれ。滋賀県立長浜北高校卒業。新江州（株）代表取締役会長。滋賀経済同友会特別幹事、滋賀経済産業協会副会長など
著書／「吃音はなおる」遊タイム出版、「循環型社会入門」新風舎

●公立大学法人滋賀県立大学＝所在地／〒522-8533　滋賀県彦根市八坂町2500
http://www.usp.ac.jp

M・O・H レポート 1

〈滋賀の明日 ― ② 大学の社会貢献〉

Tomorrow of Shiga The new story that 19 years old make

19才が創る 持続可能社会の新物語

未来の私を描いてみよう

滋賀県立大学環境社会計画専攻の一回生（19才）の学生が『持続可能社会の新物語・五話』をつくった。

これは同校政策形成・施設演2007のカリキュラムに基づいて実施された「循環型社会形成へ向けての民間企業の取組みを学ぶ」の一環。環境政策・計画学科、鵜飼准教授の指導により実施された。

■協力／滋賀県立大学・環境政策・計画学科のみなさん、
琵琶湖環境科学研究センター、近江環人
■2007年12月5日

【循環型社会に向けて】

循環型社会システム研究所・森代表の講演「循環型社会に向けて」。

【eプラザ見学】

環境に配慮した、工業用包装資材など100点を展示。

【持続可能型社会2種】

琵琶湖環境科学研究所の岩川氏・金氏の両研究員による「持続可能社会2種どちらを選ぶ?」の説明。

【桃太郎に学ぶ】

桃太郎の物語には、人生の示唆が多くある。

①時代設定＝むかしむかし
②家族構成＝おじいさんとおばあさん
③暮らしの環境＝山と川という自然の中
④桃太郎の出生＝川から、どんぶらこ
⑤貧窮（問題点）＝まずしさ
⑥敵の出現（解決策）＝鬼の制圧
⑦仲間＝サル、キジ、イヌ
⑧武器＝黍団子、刀
⑨成果＝富
⑩結果＝帰郷

これらを、現在または未来に置き換えるとどうなるか?

ポイントは持続可能な社会の実現。

【持続可能社会の新物語つくり】

5班に分かれて、物語を作成。

①役割分担（リーダー、記録、発表、演出、誉め）
②ブレーンストーミング
③物語作成
④伝達方法
⑤構成
⑥演出
⑦配役

eプラザでの商品見学

講演風景

新・桃太郎物語

学生のみなさんが作成した「持続可能社会の新物語・五話」をご紹介します。

その①
【桃の飛行物体とともに、桃太郎あらわる！】

ときは2008ねん　あるところに
ゴミもんだいに困っている　おじいさんとおばあさんがおりました
ある日のこと　とつぜん　くうちゅうに　桃のひこうぶったいがあらわれ
22世紀からやってきたという　ももたろうがとうじょうしました
「ボクたちの世界は　ゴミで埋めつくされこのままでは未来が　なくなってしまうのです」
2008ねん　ニホンのきぎょうは
ふほう投棄　CO_2の大量はいしゅつなど　利益ゆうせんの経営を　つづけていました
その後始末を　おしつけられた未来から　もも太郎は　れきしをかえるためにやってきたのです
もも太郎は　このじだいに　国民へのえいきょう力をもつ　ゆうめいじんのイチローや　ときの総理大臣によびかけ　きょうりょくをようせいしました
「ぜひやらせてください！」
イチローたちはこころよく　もも太郎の願いをひきうけてくれました
国民はイチローや　総理大臣のこえにさんどうし　「そうだ！そうだ！がんばれ　がんばれ！」
そして　もも太郎をリーダーとする国民と　イチローと　総理大臣はきぎょうにちょくせつ　うったえに出向きました
するときぎょうは　彼らのけんまくに押され　両者なっとく　もんだいは無事かいけつと　なりました
もも太郎は　また　桃のひこうぶったいにのって　未来へと　かえっていきました
それから　世のなかは持続かのうな社会へと　うまれかわり　げんざいから未来まで　みなは幸せに　くらしましたとさ

その②

【滋賀県知事は現代の桃太郎だった!?】

ときは2007年　ところは滋賀県　もも太郎は　なんと嘉田由紀子知事であります　知事は　きあいを込めてひとこと

「これから真剣に　かんきょう問題について　考えていきます」

知事は　県民の　かんきょう問題への　いしきの高さから　生まれたのでありました

そして　鬼は　びわ湖に濁水をながす人々であります

「かんきょうなんか　どうでもええわい！」

滋賀県のムラには　かんきょう問題をよく知ろうという人が　大勢いましたが　いろいろな事情から　なかなか初めの一歩を　踏みだせずにいたのでした

知事は　家来とともに　かんきょう問題への対策を考え　これを解決しよ

あるとき　家来のひとりが　道ばたでゴミを発見しました

「また　ポイすて　されちまったよう…」

さみしそうな家来に　もも太郎知事が　手をさしのべます

「このゴミ　再利用できればねぇ」

すると家来が　目をかがやかせ

「できますとも！」

家来は上着をぬぎすて　知事のまえで　ひとかわむけてみせました。そしてペットボトルを対象とする　識別ひょうじマークが　プリントされた　軽やかTシャツすがたに　なると

「ペットボトルは　リサイクルできます　古紙は　さいせい紙です！」

とイキイキしはじめました

ほかにも　バイオエネルギーについて　考える人たち　エコ団体の人たちが　知事のなかまに加わり　全員でかんきょう問題への　対策に　のぞみました

知事は　さらに　きあいを込めてひとこと　「いっしょに　がんばりましょう！」

そして知事は　家来と　たくさんのなかまを引きつれ　かんきょうにやさしくない社会　つうしょう鬼が島へ

鬼たいじに向かいました　武器は　かんきょう対策です

これにあわてた鬼たちは　とうとうカンネンして　頭をさげることにしました　「ごめんなさぁい！」

知事は　鬼たちを　ゆるしてあげることにしました

「これからは　びわ湖に　きれいな水を　ながしましょうよ」

「はーい」

知事は　かんきょう問題をよく知ろうという　多くの人が待つ　ムラへとかえっていきました

「おばあちゃーん！」

「もも太郎知事さーん！」

もちろん　勝利という　宝ものがおみやげです

かんきょう問題のなくなった　滋賀県のムラの人たちは　いつまでも幸せに　くらしました

その③

■イケメンの鬼にはご用心

あるひのこと　川でゴミひろいをしていたおじいさんが　ゴミだらけの川面に　桃がひとつうかんでいるのをみつけました

おじいさんがその桃を　うちにもってかえり　切ってみるとなかから　かわいい男の子がうまれました

男の子は　桃たろうとなづけられ　ボランティアがしゅみだった　おじいさんとおばあさんに　ボランティア精神を　たたきこまれてせいちょうしました

おじいさんとおばあさんはいやがる桃たろうを　しゅう6日でボランティアに行かせのこりの1日は　やすみではなく　反省会の日としました

それから19ねんご…　イケメンでおとめ座　ロマンチストな青年に育った桃たろうは　めいじつともに　ボランティアの鬼

鬼となりました

風のうわさで「オニが島という　めっちゃきたない島が　あるらしいよ」ときいた桃たろうは　いてもたってもいられなくなり　島を汚しているらしいオニ退治にいくことを決めました

「ひとりでも　やったろうやんけー！」

いさんでゴミ収集車にのりこみ　出発した桃たろうですが燃料のキビだんごがきれて　ゴミ収集車がエンストしてしまいました

こまっているところに　桃たろうどうよう　ボランティア精神にあふれるイケメンがあらわれ　彼のおかげでふたたび　出発するじゅんびがととのいました　イケメンは言いました

「あしたやすみやし　ボクもいきますよ～」

ふたりはつぎに　ロボットに出会いました　そのロボットは

じつはゴミであふれてしまった未来をかえるため　現代にタイムスリップしてきた　ロボットでした

ふたりとロボットが　つぎに出会ったのは　ゴミ王国からのぼうめいしゃでした　ぼうめいしゃの男は　きょくどの潔癖しょうだったのです　イケメン・ロボット・ぼうめいしゃの男は桃たろうのけらいとなり　桃たろう一行は　ゴミ収集車でオニが島にたどりつきました

そして　みなが両手に軍手をそうびし　火バサミとゴミぶくろを手に　果敢にたたかいにいどみました

オニのリーダーは　これまたイケメンでしたが　へいきでポイすてをする　最低のキャラでした

オニのリーダーは　手下の“カビるんるん”をあやつり　桃たろう軍 VS オニ軍で　激しいたたかいが　くりひろげられました

両者いっぽもひかず　こうちゃくした　戦闘状態の　そのときロボットが　さいごの力をふりしぼり　ゴミを体内浄化し　自爆したのです　ボカーン！

桃たろう軍の　全員の目からなみだがこぼれおちました

桃たろう軍だけではありません　イケメンのオニのリーダーも“カビるんるん”も　まさにオニの目にも　なみだ　なみだ…

こんなに　この世界のことをおもっていてくれた　ロボットのおもいを　ムダにしないために

桃たろうとオニたちは　力をあわせて　世直しにいどむことを　心にきめたのでした

その④

■人間のハートだって再生できる

あるムラに　ヤンキーなパパとママ
略してヤンパパとヤンママがすんで
おりました
ある日　ヤンパパが「いまからパチ
ンコいってくるわぁ」

のこされたヤンママは　まちへカラ
オケをしにいきました
ヤンママがまちを歩いていると　む
こうからパラリラ！パラリラァ！と
にぎやかなクルマが　転がってきました
思わずヤンママは　「いいんじゃな
いー」
止まったクルマを　のぞきこむと
なかには誰もいません　おまけにキー
が　ついたままです
ヤンママはまよわず　そのクルマに
のって　うちに帰ることにしました
「このクルマ　かっぱらってきたん
よぉ」
ヤンママがヤンパパに　じまんげに
話していると　とつぜん　クルマのト
ランクが　バンッ！と大きなおとをた
てて　オープンしました　そしてなか
から　ももタロウが　飛びだしました
飛びでたももタロウは「しまった！
クルマがこわれてしまった！」
これを見たヤンパパとヤンママもシ
ョックです　ふたりして「マジでぇ？」
ですが　もともと　物へのあいちゃ
くがなく　めんどうなことが嫌いな
ふたり
さっそく　おしゃかになったクルマ
を　やまへ　不法とうきする相談を
はじめました
しかし　ももタロウが
「ちょ　ちょっとまてって　クルマ
すてるの　フツーにもったいないし
リサイクルできるんじゃない」
たどたどしいニホンゴですが　いち
りあります　さらにももタロウは
「ついでに　きんじょのゴミも　リ
サイクルにもっていこう」
と　きんじょのゴミあつめに　でか
けました
「ゴミとかないですか？」
すると　コレもアレもと　生ゴミ・
ペットボトル・しんぶんしが大量にあ
つまりました
ももタロウは　それをかついで　ゴ
ミしょりじょうにやってきました
でむかえたのは　バッジをつけた役
人です　でも　あたまにオニのツノが
あるような…

「すみません　これリサイクルとか
できますか?」
ももタロウが　そうたずねると　役
人は　すばやく「できません」めを
シロクロさせ　「え?」とつぶやく
ももタロウ
役人はさらに「できませんよ　おひ
きとりください」
インギンだけれど　ようしゃのない
対応に　ももタロウは　おおよわり
これをもってかえっても　ムラに　ゴ
ミのやまができるだけです　ももタロ
ウは　役人を　せっとくしようと　ひ
っしです
するとそのとき　横から　ちがう色
のツノをはやした　役人が　あらわれ
「あ　それらのゴミも　リサイクル
できるみたいですよ」
と　さいしょのオニに　そっと　耳
うちしました
さいしょのオニは　コロリとかわり
「リサイクルできますよ」
ももタロウは　むねを　なでおろし
「ああ　よかった」

そして　生ゴミはたいひに　ペット
ボトルはTシャツに　しんぶんしはさ
いせいしに　うまれかわりました
それだけではありません　おしゃか
になったクルマも　なんと　しんしゃ
に　うまれかわったではありませんか
ももたろうは　しんしゃに　たいひ
とTシャツとさいせいしを　つんで
ムラへとかえってゆきました
この品々を見て　「すげえじゃん!」
「やったじゃん!」と　ヤンパパとヤ
ンママは　ちょーカンドーしました
そしてヤンパパが　ポツリと「オレら
でも　こうせい　できるんじゃねぇ?」
それから…　ヤンパパとヤンママは
ヤンキーをそつぎょうし　普通のパ
パとママになり　かいしゃづとめをし
ながら　ももタロウと　いつまでも幸
せに　くらしました　めでたしめでたし

その⑤

■地元商店街VS大手スーパー 勝つのはどちらだ!?

滋賀県のあるところに　やさしいお
じいさんとおばあさんに　大切に育て
られた　桃の実がありました　なまえ
は　太郎です
「おまえは　すっごいうまい　桃だ
から　がんばっていい人に　食われる
んだよ」と　おじいさん

「おまえに　勝てる　桃はないんだよ」と　おばあさん
ふたりにそう言われ　桃の太郎は　うっすらと目に涙をにじませ
「う　うう…　いままでありがとうございました　それではいってまいります！」
「行ってきな！　桃市場を牛耳るんじゃぞー」
おじいさんとおばあさんに見おくられ桃の太郎が出荷されたのは　町のとある商店街でした　しかしあまりのさびれように　がくぜんとする桃の太郎
人通りはなく　シャッターのおりた店もめだちます
「な　なんなんじゃー！　オレはこんなへんぴなところへ　来るために生まれたんじゃなーい!!」
商店街がさびれた原因は近くにできた　大手スーパーのえいきょうでした

「これはオレひとりで　たちちうちできる問題じゃない　なかまをあつめなければ！」
なかまあつめに　奔走する桃の太郎　さびれた商店街のげんじつをうけいれ　人生をなかばあきらめていた　八百屋のハクサイ　肉屋の近江牛ロース　魚屋のアユに　おじいさんとおばあさんから与えられた　“愛”という名のキビダンゴをわけてやりました
それを口にしたハクサイと近江牛ロースとアユは
「このままではアカン！　いまがやるときやぁ　スーパーに勝つぞ！」「まだまだオレらは終わってない！」「よっしゃぁがんばるでぇ！」
桃の太郎もはりきります
「みんな！　がんばって大手スーパーから　客という名の宝を　とりもどすぞ！」
いっぽう　こちらは　大手スーパーのてんないです　北海道

産のジャガイモ　オーストラリア産の牛肉　インドネシア産のブラックタイガーが　なにやら商店街を小バカにしつつ　グローバルな経歴をじまんしあっています

「オレには　北海道産の　プライドがあるしな」

「見てもらえば　わかるけど　オレ　インドネシア」

「なんか　商店街のれんちゅうに　不穏なうごきがあるらしいけど　なんにもできんやろ　どうせ」

「むだむだ　しょせん　このスーパーには　勝てっこないって」

そのころ　大手スーパーの店頭では　桃の太郎とハクサイ　近江牛のロースとアユが　ひっしの演説で　道ゆく人にうったえかけます

「皆さん！　いまのニホンには　遠く県外や海外からやって来た　食品があふれ　地元のコメやヤサイが　おろそかにされているのです！　しかも食品をはこぶには　燃料がひつようであり　そのプロセスではCO_2を　はいしゅつします　ひんしゅ改良や　のうやくの問題もあります　もっと地元の食材に目をむけてください！」

「そうですとも！　フードマイレージということを　わたしたちと　いっしょに考えてみてください！」

そしてつぎの日…　そこにはいつもより　人出のめだつ商店街と　いつもより　活気のない大手スーパーがありました

これを見て　よろこぶハクサイと近江牛ロースとアユ

「むっちゃ客がきてるよ！　オレら売れるって」

みごと商店街は　フードマイレージということを　すこしでも考えてくれた　グリーンコンシューマーという　宝をとりもどしたのでした　めでたしめでたし

〈桃太郎ワークショップ感想〉

”ストーリー“を考える 楽しく意見が共有できる

三田　恵理子

最初、「循環型社会をテーマに桃太郎の新しい話をつくりましょう！」と言われたとき、何をどうしたら良いのか全く分からなくて焦りました。グループのメンバーも同じだったらしく、なかなか話は進みません。しかし、発表までの時間は迫ってきます。焦りつつ、みんなで案を出して、ストーリーにして、発表する劇の配役や小道具を考えて、いろいろ大変でした。がんばって考えた劇も発表ではグダグダ…。でも、なんやかんやと言いつつ、みんなで案を出しあって、ストーリーや劇について考えているとき、笑いが絶えることはなくて、失敗もしたけどとても楽しかったです。

それぞれのグループの発表を見て、”循環型社会“といっても、いろいろな見方ややり方があるということに改めて気づきました。また、グループ内で話を考えていて、「この先は普通どうなるんやろ？」と行き詰まることがあり、私たちだけでは分からないことがまだまだあるということを実感しました。”循環型社会“をつくっていくためには、いろいろな分野のいろいろな考え方を持った、多くの人の力が必要になってくるのではないかと感じました。

児島　飛鳥

私たちは環境問題をテーマに桃太郎の話にあわせて物語を作っていきましたが、その中で新しい手法で環境問題を見つめなおすことができたと思います。ひとつの問題を考える際に、その問題を解決していく過程で何が必要か、問題を解決すればどのような結果が生まれるかということを考えながら物語をつくっていく中で、自分自身もその問題について考え、理解を深めることができ、また、グループの中で考えや意見を共有することができました。

初めての手法だったため、最初はどのようにすれば良いかなど、わからないことばかりでしたが、グループの中で意見が出るたびにだんだんと話を考えることが楽しくなっていきました。このように楽しみながら環境問題について考えていくいい機会になりました。

作画にはいります

ストーリーを抽出しています

発表風景、中央が兒島さん

自然派?技術派?
二つの持続可能な社会

鵜飼先生のお話

〈3時間〉

新桃太郎物語の創作にあたり、彼らに与えられた時間は、たった3時間です。

その間に、主題を理解し、解決策を議論し、表現方法を考え、脚本を書き、発表練習をする。出題した私自身、果たして完成するのか、どのようなものが出てくるか、あと、10分、5分とカウントダウンしながら、かなりヒヤヒヤしていました。

それでも彼らは必死になって、互いに共同し、役割分担しながら作品を仕立て上げました。紙面では伝わらないところが残念ですが、実際の発表は、これが3時間でつくったものかと疑うほど、楽しく、充実したものでした。彼らの潜在能力がうまく表現されたのだと思います。

〈環境問題の本質を見いだす人材の育成〉

彼らの在籍する環境社会計画専攻は、平成20年度より「環境政策・計画学科」となります。この学科では今回の授業でもあるように、幅広い知識の修得と、徹底した現場主義から、自ら環境問題の本質を見いだし、考察し、解決する能力を養うことを目標にしています。現場に足を運び、多くの人々とのふれあいを通じて、自分自身を磨く、そんな仕掛けが4年間一貫してカリキュラムに盛り込まれています。

琵琶湖を抱く環境先進県滋賀を舞台に、私ども教師陣は、彼らの自由な発想と潜在能力の開花と自立心の向上を支援していきたいと考えています。

ホームページ・http://depp-usp.com/

「彼らの潜在能力は無限」指導の鵜飼准教授

●うかい おさむ＝1969年、東京生まれ。大成建設設計本部にて建築設計、環境デザイン、ランドスケープデザイン、再開発、まちづくりコンサルティング業務に従事後、2006年11月より現職。大学院近江環人地域再生学座　担当。専門は、まちづくり、地域活性化、コミュニティ・ビジネス。技術士（都市及び地方計画）、一級建築士。彦根市石寺の環濠集落内土ヨ民家に居住。

1

Photo Report

〈滋賀の明日 — ③ 楽しく美しく暮らす〉

Discover Kohoku,again— Tour for old house living style

湖北の魅力再発見

古民家暮らし体験ツアー

（文・写真）
奥貫 隆
滋賀県立大学環境科学部教授

2

地域再生をテーマとする取り組みが各地で展開されている。高齢化や担い手不足によって活力を失いつつある地域。都市との交流により地域を活性化することに対する期待は大きい。一方、環境と調和した健康的な暮らし／LOHAS（ロハス）*を求める現代人が、行動・実践の場として中山間地の集落地を再評価している。地域が継承してきた文化や暮らしのスタイル、コミュニティや伝統行事。一度は、その煩わしさから逃れるかのように離れていった人々も、利便性や経済性を追求する都会生活では得ることのできない大切なものやことの存在に気づき、ふるさと回帰に拍車をかける。

滋賀県では、平成19年度に「都市と地方の交流居住・移住促進事業」を創設し、こうした社会の動きをサポートする取り組みをスタートさせた。昨年の10月から12月にかけて、湖北の4地域（伊吹・浅井・余呉・木之本）を対象に「農のある田舎暮らし体験」や「古民家暮らし見学ツアー」などを実施した。ここでは、長浜市浅井地区で実施した古民家ツアーをフォトレポートし、湖北の暮らしの魅力を再発見する。

*詳しくは、湖北地域への交流居住・移住に関する情報サイト（co*hok style）を参照。
*LOHAS（ロハス）：Lifestyles Of Health And Sustainabilityの略

古民家暮らし体験ツアーは、滋賀県からの委託で滋賀県立大学「地域づくり調査研究センター」及び「近江楽座」が企画、実施した交流事業のひとつである。平成19年11月3日「浅井の里」の古民家をめぐるツアーには、定員25人のところ県内外から50名を超す応募があり、ツアーを2回にわけて実施するほどの反響があった。古民家へ移り住んだ家族の体験談、交流事業に取り組む地域リーダーとの意見交換、空き家古民家の現状見学などのメニュー。参加者は、それぞれの古民家ライフを夢に描いた。

1.長浜市東野町の古民家。大工さんが住んでいた質の高い住まいに大津市から移住した家族の満足度は高い。　2.軒下のプランツ・アート。古民家を訪れるひとへのおもてなし。　3.二つの広間にあふれて古民家暮らし体験談に耳を傾ける参加者。　4.懐かしさとくつろぎを感じさせる和室。　5.ツアー前のミーティング。滋賀県、県立大学、古民家ネットワークほかの協力で20名を越えるスタッフ体制。　6.庭に放たれたヤギやニワトリが、ツアーの人気を独り占め。　7.ツアー参加者の履き物が土間いっぱいに広がる。　8.廊下越しにやわらかな陽光が射し込む部屋。　9.居間の片隅にモダンな薪ストーブ。

1.鍛冶屋町の廃屋を利用した「アトリエ環琵琶湖」の庭先で手作りの昼食を楽しむ。 2.二階の大広間は、造形作家の制作スペース。琵琶湖の周りで活躍する芸術家たちがここから巣立っている。 3.道筋に面した屋敷門。 4.造形作家が制作した椅子と野外卓。

5.三つめの視察地、池奥集落を目指すツアー参加者。　6.池奥公民館で行われた地域リーダーと参加者の意見交換会。地域とのつきあい方、仕事の有無、農作業の実情、生活施設の整備、獣害対策など、真剣な質疑が交わされた。　7.池奥地区で空き家となっている古民家前で記念写真撮影。
8.渡り鳥が飛来する西池の野鳥観察施設で地区周辺の自然や環境について学ぶ。

1.東主計町の本格的な古民家再生事例を見学する。新築と変わらない建設費をかけた究極の伝統住居。　2.機能的なシステムキッチンとダイニング。　3.多目的に利用できる屋根裏の大空間。　4.現代センス溢れる囲炉裏部屋。5.秋の陽を受け、風に揺れるススキ。　6.杉木立をとおして見る古民家に深まりゆく秋を見つける。　7.上野町の山間にひっそりたたずむ小堀遠州の菩提寺、孤篷庵。　8.孤篷庵山門脇の楓。晩秋に訪れる人影も少ない。　9.湖北のランドマーク、伊吹山。三島池と初冬の山容。10.琵琶湖夕景、竹生島を遠く望む。

6

5

8

7

10

9

奥井 隆

●おくぬき たかし＝1944年東京生まれ。68年東京大学農学部（緑地計画）卒業。96年から滋賀県立大学環境科学部教授に就任、景観計画を担当。滋賀県景観審議会、大津市景観審議会、長浜市景観まちづくり計画委員会などに係わる。滋賀県立大学の文部科学省現代GP「スチューデントファーム“近江楽座”」（平成16～18年度）及び地域再生人材創出拠点の形成プログラム「近江環人地域再生学座」（平成18～22年度）を担当する。

美しい琵琶湖の地域再生をお手伝いします

heart warming story “Contact”

ふれあい
第九回
『がんばれ!!』

中井 二三雄

クラス対抗の寒中リレー大会が行われた。

走るのが遅い男の子の番が来た。彼は必死になって走るのだが、どんどん抜かれる。

ついに、ガキ大将が興奮して叫んだ。

「はよ走れ！ 負けるやないか！」

男の子たちは、その声に影響されて口々にやじった。

「ドンクサイやっちゃな」

「負けたらお前の責任やぞ」

「しっかり走れ！」

その時、ある女の子が、はやし立てる男の子たちのほうをキッとにらみつけてから、走る子に向かって思いっきり大きな声で叫んだ。

「がんばれ!!」

続いて女の子たちの歓声が起こった。

「がんばれ!! がんばれ!! がんばれ!!」

それは、男の子たちも巻き込み、クラス全員の大歓声が冬空にこだました。

人の欠点を責めるより、一生懸命がんばっている人間を励まし応援する。なんて気持ちのいいことなんだろう。みんな心まで温かくなったような気がした。

●なかい ふみお＝1949年、守山市生まれ。広告・出版・映像関係の仕事を経て、1976年から著述業。滋賀県文化振興事業団発行「湖国と文化」編集長。大津市在住。

M・O・H レポート 2

〈滋賀の明日 — ④ 〉

A living experience report in kohoku

滋賀・湖北地域での暮らし体験レポート

亀山 芳香
近江環人　湖北古民家再生ネットワーク

滋賀県では、昨年の10月から12月にかけて湖北地域の4地域（伊吹、浅井、余呉、木之本）で、空き家などを活用した都会からの移住や交流をすすめるきっかけづくりとして、暮らし体験を実施しました。体験プログラムの企画・運営には滋賀県立大学近江楽座の学生たちも参加しました。

湖北地域への定住促進を図る情報誌

伊吹山麓　農のある暮らし体験
10月21日(土)・22日(日)

青空の下、姉川流域の集落を散策しました。都会では見られない景色に、参加者の目はキラキラ。意見交流では都会の人と地元住民が本音をぶつけ合いました。芋掘りや豆腐づくりも体験し、伊吹山麓の自然の恵みを肌で感じました。

浅井の里　古民家の空き家見学
11月3日(土)・12月1日（土）

都会から移住して自給自足に近い暮らしをしているお宅を訪問し、田舎暮らしの魅力を語っていただきました。古民家の空き家を見学し、賃貸を希望する人も出現。古民家再生住宅を見学し、古民家も現代の技術で住みやすい家になることがわかりました。

わたしは、滋賀県の湖北地域に見られる「古民家」に興味を持ち、古民家の調査や、古民家再生に向けた活動に取り組んでいます。湖北の古民家は、柱や梁などに太いケヤキが使われているのが特徴で、それらによって構成される重厚な空間はとても魅力的です。しかし、地域の過疎化にともない、多くの古民家は「空き家」となり、解体され、あるいは朽ち果て、地域独自の古民家が織り成す景観は失われつつあります。

一方、都会では、団塊の世代の人や若者たちが田舎暮らしに憧れて、農業をしながらの古民家暮らし、あるいは都会で仕事をしながら田舎暮らしも楽しめる二地域居住といったものへの関心を高めています。

過疎化や高齢化が進む地域ににぎわいを呼び戻し、集落機能の維持のためにも「田舎に暮らしたい人」と「空き家」をつないで、効果的に移住者を受け入れる必要性を感じています。

奥琵琶湖余呉　2日間で田舎暮らしを上手に知る

11月10日(土)・11日(日)

地元住民の案内で、管山寺にお参りしました。空き家だった古民家を改修した余呉小劇場・弥吉で、鍋を囲んだり、意見交流をおこなったりしました。薪割りやもちつきも体験し、2日間で田舎暮らしの醍醐味を味わうことができました。

北国街道木之本　よみがえれ町家再生塾

11月17日(土)

木之本宿を散策し、町家暮らしの様子を垣間見ることができました。湖北古民家再生ネットワークのメンバーの指導のもと空き家の町家で修繕体験。建具を取り払って広くなった四つ間で、Uターン者の体験談を聞き、地元住民と意見交流をしました。

亀山芳香

●かめやま　よしか＝滋賀県立大学大学院人間文化学研究科。「湖北古民家再生ネットワーク」を通じて、古民家再生の普及活動、見学会や講演会の開催、古民家の調査・研究に取り組む。近江環人（コミュニティ・アーキテクト）として、二地域居住や移住を考えている都会の人たちを、滋賀県内の高齢化・過疎化の進んでいる農山村などに受け入れる仕組みづくりに携わり、古民家を活かした地域の活性化を目指している。

都会の人から地元住民への質問

意見交流会の中で多かった質問を取り上げました。

- 借りられる空き家はありますか。
- 空き家や農地はいくらで借りられますか。
- 農業を教えてもらうことはできますか。
- 働くところはありますか。
- 退職した人でも受け入れてもらえますか。
- 病院は近いですか。
- 雪はどれくらい降りますか。

M・O・H レポート3
〈滋賀の明日 ―⑤田舎暮しを増殖する〉

地域の記憶とつながる住まい

古材と新材の組み合わせ

Memory and a house

清水 安治
安曇川流域・森と家作りの会　湖北古民家再生ネットワーク

湖北古民家再生ネットワーク

あなたが「懐かしい」と感じるものは何ですか？

昨年、話題となった映画「ＡＬＷＡＹＳ　続・三丁目の夕日」を観ると、私より上の世代の人はほとんど例外なく懐かしいと感じるようだ。この映画の時代設定は私が生まれる少し前の昭和30年代前半。スクリーン上に溢れ出る昭和のモノや風景。このモノや風景を懐かしいと感じるのは、その時代の記憶として脳裏に刻み込まれているからだろう。

■古民家再生

懐かしい風景の代表的なものの一つが茅葺き民家だといわれるが、茅葺き民家に限らず、生まれ育った住まい、もしくは身近にあった民家のたたずまいは原風景として誰もが懐かしいと感じるだろう。なぜなら、そこには多かれ少なかれ、かつての想い出が詰まっているから。幾世代にもわたって引き継がれてきた古民家といわれる住まいはなおさらだ。個人に留まらず家族、家族に留まらず地域の記憶として存在している。

しかし、地域の記憶そのものでもある古い民家に価値があると感じ、住み継がれることは実は希なことである。そのほとんどは評価されることなく解体され、そこに新しい風景がつくられることが普通でさえもある。これは、社会の環境が変化を求め、効率をめざし、グローバル化を進めるようになってしまったこととも無関係ではない。

数年前、何かしら自らを突き動かす力のもと、生まれ育った築百数十年の自宅に住み続ける決心をし、手探りで再生した頃はそろそろ社会の価値観に変化が現れていたようである。自宅を蘇らせたあとで、同じような考えを持つ人からの依頼を受け、これまで10例程度の再生に関わってきた。

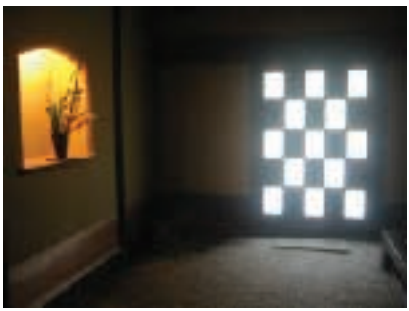
■湖北の古民家

その中でも、特に湖北の古民家に出会った時の鮮烈な驚きは今も忘れることはない。私の住む湖西からそう遠くもない地域であるにもかかわらず、この地域の民家の間取り型式の特異性、その柱や梁が組み合わされた架構の重厚さには圧倒された。この今も多く残る湖北地域の古民家は「余呉型」もしくは「伊香造り」と呼ばれ、民家研究の分野では「合掌造り」や「甲造り」などと並ぶ日本民家の代表的なものとして知られている。

私が驚いたこの特徴は、実は湖北の民家に備わる魅力でもある。一般に多く見られるいわゆる4間取り型式をとらない広い室内空間。その広さをかたちづくるために太い柱を建て、長い梁を交叉させる豪快な軸組みには、湖北地域に多く植生するケヤキ材がふんだんに使われている。おそらく、住まい手にとってはあまりにも日常的すぎて見逃しているかもしれないが、実はそこには現代の住宅ではめったに見い出せない優れた価値が紛れ込んでいる。しかし、このように湖北の民家は地域の貴重な財産ともいえるものでありながら、実際には十分な評価を受けることなく次々と姿を消しているのを目の当たりにする。

傷んだ柱の根元を差し替え（根継ぎ）

改装後、古民家にお洒落さが加わった



新しい感性を取り入れた玄関

改装前の古民家

■地域の記憶を引き継ぐ

この地にもかつてはあったはずの住まいを繕い、住み続ける思想が途絶えつつある現状。これを見過ごすことに焦りにも似た責任を感じ、「湖北古民家再生ネットワーク」の活動が始まった。地域に根ざした古民家再生の方法論を見いだし、その受け皿となることをめざしている。いくつかの事例に関わる中で、再生を果たし、引き続き住み続けることができるようになった住まい手がふと漏らす想い―「これで先祖に顔が立つ」「次の世代に責任が果たせた」「壊すことへの後ろめたい気持ちから開放された」。これらの率直な感想には、かけがえのない住まいの記憶を引き継げることへの安心感、満足感が滲み出ている。

古民家再生については、古材をリユースすることによる資源の循環、あるいは廃棄物の発生抑制、地域の伝統技術や風景の継承、雇用の再生など社会的な貢献に価値を認め、評価されることが多い。しかし忘れてならないのは、

古民家再生の現場見学会の様子

は、住まい手自らがその家族や地域の記憶を未来へ引き継げることになり、言い知れぬ充実感に満たされるということだ。社会的貢献性を振りかざしているだけではその拡がりは期待できない。

私たちは、新しい時代の匂いをかぎ取り、住まい手の想いを受け止め、地域の記憶を受け継ぐバランス感覚を持ち続けたい。

“湖北の懐かしい未来をつくる”これが「湖北古民家再生ネットワーク」のキャッチフレーズだ。

清水安治

●しみず やすはる＝1961年、高島市生まれ。自宅の改修をきっかけに古民家再生の魅力を知り、ライフワークとして県内各地で再生に取り組む。民家の古材を活かすとともに、近くの山の木を使うことで、地域の資源にこだわった家づくりをめざしている。「湖北古民家再生ネットワーク」「安曇川流域・森と家づくりの会」メンバー。滋賀県政策調整部地域振興課職員。一級建築士。

連絡先 y-43zu@guitar.ocn.ne.jp

M・O・H レポート 4

〈滋賀の明日 — ⑥ びわ湖がつなぐ人の環 〉

Hug it, and Biwako

「抱きしめて BIWAKO」20周年記念事業

しょうがい者と手をつないだ"あの日"

20年前、しょうがい者をはじめとする25万人が琵琶湖を取り囲んだ。
手をつないで。手をつなぐために、1000円をはらった。
重症心身しょうがい者施設が引越しを果たした。
"あの日"つないだ手のぬくもりは今も・・・。

■ びわ湖ホール
■ 2007年11月7日

心温まる物語

手と手がつながった日

A heart warming story “The day when a hand & hand”

今関 信子

「今年、二十周年なんですよ。それで…。」

電話は、高谷さんからだった。高谷さんは、小児科の医師だ。二十年前は、第一琵琶湖学園で働いていた。

「『抱きしめてBIWAKO』で考えた事、やった事を思い出したい、そんな思いからイベントをしようとしているのですが…。」

わたしは、実行委員を引き受けた。

「抱きしめてBIWAKO」は琵琶湖の周りで手をつなぐイベントだった。滋賀県のみならず、全国から関心を寄せられた大きな波だったから、記憶している人もあるに違いない。

重症心身しょうがい児（者）の施設、第一琵琶湖学園を、引越しさせたいという願いがあった。当時、学園は、長等山の麓にあったのだが、そこは、大津の僻地と影で言われるほど街から離れていた。その上、施設は老巧化していて不便だった。

「この人達も共に生きる社会を作りたい。」

「このさい、命のことを考えあいたい。」

「25万人が手をつなぐ？ 面白そう。」

「ギネスに挑戦かな。」

十一月八日正午から一分間、琵琶湖のまわりで立つ。そのために千円出す。琵琶湖の周囲は、約235キロメートルあるから、手と手をつないで琵琶湖をかこむことができたら、諸経費をひいても、琵琶湖学園の引越しのために一億円くらい作れるのではないか。

いくつもの願いや様々な思惑を合わせて、『抱きしめてBIWAKO』は動き始めた。

最初は順調だった。事務所になった「はり丸」の壁に貼られた参加者を示す棒グラフは、どんどん伸びた。他府県からの申し込みもあり、運動は広がりを見せた。

うまくいくかに見えた運動は、途中、何度も行き詰った。市民の参加が止まって、「南湖だけ囲もう」と考えねばならぬところも経験する。

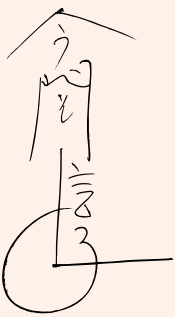
が、十一月八日、琵琶湖湖畔には手をつなぐ人の列ができた。比叡山のお坊さんとカソリック協会の神父さんが、子どもと車椅子のお年寄りが、さまざまな民族衣装に身を飾った人たちが、高校生が、全国のバイクの愛好者が、メッセージで参加した九州の人が漁船が…、長く長く続いた。

琵琶湖学園は、平地に引越しできた。美しい自然に恵まれた静かな場所だ。もう渡り廊下を歩かないでいい。これなら、ストレッチャーがスムーズに押せるはずだ。

二十周年を迎えて、私は思う。「あの出来事は、『現代の民話』だ」と。民話は、「昔こんな事があったよ」とか、「こんなことがあったから、今、こうやってるんやわ」とか、感動したことや大切なことを話の中に包み込んで語り伝えていく。そして、それは、多くの人の心に届き、次の時代へと語り継がれていく。だから、民話は昔のものではない。今も、民衆によって生み出されているのだ。

二十年前、手と手がつながった出来事は、時代をこえて語り継いでいきたい話だ。祖父母が孫に、先生が子どもたちに…。さまざまな人の口から口へ、心から心へと。

イラスト：千田 満



●いまぜき のぶこ＝1942年、東京生まれ。東京保育女子学院卒業後、幼稚園教諭となる。7年間保育者として働いた後、創作活動にはいる。日本児童文学者協会理事。
〈主な著書〉「小犬の裁判はじめます」1987童心社 青少年読書感想文コンクール課題図書。「さよならの日のねずみ花火」1995国土社 青少年読書感想文コンクール課題図書、厚生省中央児童福祉審議会推薦文化財。「地雷の村で『寺子屋』づくり」2003 PHP研究所 など多数

●せんだ みつる＝1950年、滋賀県生まれ。大阪のデザイン会社を経て1980年「イラストレーションスタジオアビーロード」設立。イラストレーションを中心にポスターやパンフレット等を制作、ロゴマークやパース・キャラクターデザイン等グラフィック全般、広告・エディトリアルを中心に活動中。

抱きしめてBIWAKOその後リレートークのもよう

「抱きしめて　BIWAKO」20周年記念事業

あの優しさをもう一度

■琵琶湖を人が抱きしめた

20年前、26万人の人々が手を取り合って琵琶湖を抱きしめた「抱きしめてBIWAKO」。びわこ学園医療福祉センター草津が事務局となり、小林隆彰実行委員長（比叡山延暦寺）をはじめ、中澤弘幸氏、高谷清氏（小児科医師）、山崎正策氏（びわこ学園）、河合幸子氏（しみんふくし保育の家）、今関信子氏（児童文学者）など各界を代表するメンバーが「抱きしめて」を実現した。2007年11月7日彼らが実行委員となり、『「抱きしめてBIWAKO」20周年記念事業　あの優しさをもう一度』をびわ湖ホールで盛大に開催した。

式典は知事メッセージで始まり ①抱きしめて BIWAKOその後リレートーク ②モンゴル国立馬頭琴交響楽団演奏会 ③イベント案内 ④「抱きしめてBIWAKO」が人間、社会に訴えるもの、で締めくくられた。

内容をご紹介しよう。

「わたしも輪の中に入り、命の尊さ、

「その人らしく生きていく」と今関氏

つながりの大切さを実感した事をはっきりと覚えています。―略―県といたしましても障害のある人が『地域で暮らし、働き、活動する事の実現』を目標に人と自然が共生できる、だれもが安心して豊かに暮らせる地域づくりをすすめるとともに、４００万年の歴史を持つ母なる『琵琶湖』と、それを取り巻く自然の力を壊さず、将来に引き継ぐ努力をしていきたいと思います」

（滋賀県知事　嘉田由紀子）

びわこ学園でのパネル展示

■障害者も地域の一員

１９８７年11月８日正午、全国各地から集まった26万人の人々が手をつなぎ、びわ湖の大自然を抱きしめ、自然の命や人の命の大切さとすべてを受け入れる心の優しさを確認した（「びわこ学園からの報告」より抜粋）。

当時、旧第一びわこ学園は老朽化していた。移転カンパを募ることが決められたが、カンパした人が琵琶湖の水際まで出向いて手をつなごうと企画し、26万人が琵琶湖を抱きしめた（「抱きしめてＢＩＷＡＫＯ」から20年より抜粋）。

あの日、「育つリズムは違っても、人はみな育っていく。その人らしく生きていく」の想いが琵琶湖のまわりにみちていました（「共に生きる」より抜粋）。

大自然と向き合い、重症心身障害者に心を寄せるとき、人間本来の美しい心に還ることができます。荒れ果てた人間の心を取り戻したいと希います。（他

タイムカプセルが掘り出された!

参加者は300名、あの頃を思い出して

メッセージが次々と読み上げられる

の為に利益しているかけがえのない存在より抜粋）、以上「抱きしめてBIWAKO」とその後リレートークより。

会場からは「あの頃のつながりがよみがえった」の声が多く聞かれた。

■タイムカプセルで夢が甦る

翌11月8日は〝タイムカプセルを開ける会〟がびわ湖学園医療福祉センター草津で実施された。

20年前に埋められたタイムカプセルはブルーの塩ビ製で長さ1メートル、直径10センチの円錐形。封入物はメッセージカード、協賛者名簿など。ビニール袋が5つタイムカプセルから出てきた。

次々にメッセージカードが読み上げられる。

「抱っこしてもらう気持ちよさがわかったから、20年後は私がみんなを明るくしたい」

「20年後はびわこ学園が地域の人ともっと触れ合えますように」

「20年後はパソコンをしたい」

いずれも障害を持った学園の生徒のメッセージ。職員、実行委員、応援者とともに〝20年間をともに歩んだ〟仲間が見守る。ひとつの絆が長い年月を経て、連帯していく様子が垣間見えた。柔らかな笑顔が印象的だ。

最後は20年前同様、手をつなぎ、輪になった。そしてみんなで〝琵琶湖周航の歌〟を歌った。

M・O・H レポート5
〈滋賀の明日 ―⑦〉

森と企業をつなぐ「森の町内会」

It connect a forest and the Comoany

半谷 栄寿
環境NPO「オフィス町内会」事務局代表

びわ湖プロジェクトフォーラム『第一弾 森が動く!』基調講演より

■愛東公民館 愛東文化ホール（東近江市）
■2007年12月9日

日本の縮図、地球環境問題の縮図といわれる琵琶湖。その琵琶湖で、湖底の酸素濃度が低下するという事態が起きています。赤潮の発生から30年、今、新たな危機を迎えた琵琶湖に、流域で暮らす私たちは何ができるのでしょう？　そのヒントを模索するため、先に開催された「びわ湖プロジェクトフォーラム」では、『第一弾 森が動く！』と題し、行政・NPO・市民らによるトークセッションが行われました。その中で、環境NPO「オフィス町内会」の事務局代表・半谷栄寿さんより、森と企業をつなぐ「森の町内会」の活動について基調講演が行われました。「森の町内会」が取り組む〝間伐を促進する新しい仕組みづくり〟から、健全な森を育むためのアイデアと、新しいプロジェクトを継続して運営するための鍵が見えてきます。

「森の町内会」の親元、「オフィス町内会」について

「オフィス町内会」は都心のオフィス街で、助け合いをやろうと、今から16年前の平成3年に活動を開始しました。会場の皆さんの中にも、企業や行政にお勤めの方がおられると思いますが、オフィスからは不要になった紙が出ます。ゴミ箱に捨てれば紙ゴミになりますし、分別すれば再生紙の原料になります。平成3年当時、企業として組織的に不要になった紙を古紙に分別する活動は、全くなされていませんでした。それを組織的に始めたのが「オフィス町内会」です。現在の会員企業は112０社で、そこに働く10万人以上が、古紙の分別を習慣にしています。また、古紙を再生紙の原料として、製紙メーカーに運ぶという大切な役割を担っているのが会員回収会社であり、その数は現在40社にのぼります。その両方の組み合わせで、「オフィス町内会」は毎年7千t以上の古紙を回収しています。これは都心を中心とする関東地域の、年間古紙回収量の9百分の1に相当します。この量が大きいか小さいかは、活動の中身を物語るものではなく、そもそも環境に貢献する行為自体が素晴らしいことではないかと思っています。

そうした行為を継続するために、「オフィス町内会」では、オリジナルの仕組みを作っています。『経済性＝継続性』を実現しようとしています。これが考え方の一つ目です。経済性といっても、お金を儲けるという意味ではなく、この場合はあくまで、活動を継続するための経済性です。活動を継続するには、会員企業や会員回収会社のリサイクルに貢献しようという意思が、もちろん必要です。その一方で、経済性を伴った方が、活動を継続しやすいのです。

古紙のリサイクル活動を継続するための三つの経済性

今日の本題ではありませんが、「オフィス町内会」には三つの経済性があります。一つ目は会員企業の負担です。

東京都の場合、紙ゴミ（※一般廃棄物）の処理経費は1kg当たり28.5円かかります。これに対して「オフィス町内会」の会員企業の負担金は1kg当たり16.8円です。285円に比べ40％以上も負担が減ります。きちんとリサイクルにまわし、社会的に役立って、かつ負担金も40％以上コストダウンできる。だからこそ1120社もの企業が、16年間にわたって活動を継続しているのです。次に二つ目は会員回収会社の安定です。回収会社は家庭や企業から回収した古紙を、古紙の問屋に持っていって売却するのが唯一の収入源です。ところがなかなかその収入を確保できないという厳しい現実がありました。「オフィス町内会」が始まった16年前というと、古紙を出して、回収会社からトイレットペーパー等のちょっとした金品をもらうのが当たり前のことでした。しかし「オフィス町内会」は、古紙を出す際に、回収経費もあわせて負担するという仕組みを、日本で最初につくった団体なのです。先に述べた会員企業の負担金16.8円の内、11.3円を回収経費に充てて、回収の機能をきちんと確立しています。そして、概ねその差額を、三つ目の経済性である事務局の独立採算に使っています。私の本業は、東京電力㈱に勤務するビジネスマンとしての仕事であり、「オフィス町内会」はボランティアなのですが、これだけの会員企業を抱え、年間7千tもの古紙を回収し、一定の経済原則で会を運営するとなると当然、事務局のオフィスや専属のスタッフが必要です。今、都心に小さいですけれどもオフィスを構え、4人のスタッフに働いてもらっています。そしてオフィスの賃借料とスタッフのお給料、そうした経費が独立採算制で賄えるようになっています。何らかの補助金であるとか、特定の企業からの寄付金で賄っているということは一切ありません。この三つの経済性についても評価をいただき、本日この場にお招きいただいたのではないでしょうか。

「森の町内会」は、間伐促進の新たなモデル

「オフィス町内会」は〝新たな志〟として2年前から、「森の町内会」という新しいプロジェクトを始めました。森林の育成に貢献したいという志を持ち、具体的には間伐を促進する新しいグリーン購入の仕組みづくりに取り組んでいます。手入れされた森林は、京都議定書でもCO_2の吸収源として認められます。そして植物や動物、様々な命を育みます。さらに水を蓄え、土砂災害等から私たちを守る機能を備えています。

森の町内会の活動を紹介する。右はカレンダー。

パワーポイントで説明する半谷氏

しかし、間伐が行われず太陽の光が地面までで届かなくなった森では、こうした森林本来の機能が低下し、極めて大きな問題として叫ばれていることは、皆さん既にご存知だろうと思います。なぜ間伐が行われないのか？　大きな理由は、私たち自身が国産の木材を使わなくなったことです。今や国産材の市場シェアは30％を切っています。そうなれば当然、森林の育成に力を発揮してきた林業の元気がなくなります。そういった状況下で、「森の町内会」は間伐を進めるために、どんな仕組みをつくれば良いのか。新しく事を始めるには、やはり"経済性がつくれるかどうか"が、大切な考え方になります。ですから、なぜ間伐が行われないのか、その経済性を見直す必要があります。

間伐を行うには森林組合の方々にプロとしての作業をしていただく費用をはじめ、山の奥に入るための道を造る費用、そして間伐材といっても直径20cmはあるような立派な木材ですから、必ず何かに役立てるため、いずれの先かに輸送する費用と、これだけのコストがかかります。それに対して間伐することで得られる収入は、林野庁から一定程度の補助金と、木材として売却した代金があります。ところがこの二つを足しても、間伐をするだけのコストは生まれません。2年前に、「森の町内会」の間伐実施のパートナーである岩手県岩泉町で第1回の間伐を1.8haの規模で行いました。実際にかかった費用が177万円だったのに対して、収入は109万円と68万円分が不足しました。こういう状態ですから、間伐をやりたくてもできない。これが現実です。

そこで「森の町内会」は、コストに対する不足部分をどうやって賄うか、という発想の仕方をしました。企業や行政のオフィスでは、毎日のように紙が使われます。どうせ使う紙なのですから、その紙に間伐経費の不足分を広く薄く上乗せして、端的に言えば、割高な紙を使おうということです。そして、この趣旨に賛同してくれる企業を、私たちは間伐サポーター企業と呼んでいます。従来からの紙代に、その約10％を間伐促進費を上乗せして、それは企業の環境貢献費用として負担してもらおうというものです。そういう意思を持った間伐サポーター企業の数が増えれば増えるほど、間伐が進まない理由である経費の不足分を補える仕組みです。実際に間伐サポーター企業では、自社のパンフレット等の印刷物に、コストアップの紙を使っていただいています。間伐サポーター企業も自社の環境貢献活動として、間伐に寄与した紙を割高でも使うのだという意思があります。ですから当然、コストアップの紙をつくっても売れます。

順序としては、間伐サポーター企業から事務局に、間伐に寄与した紙を使うという意思を伝えてもらいます。すると事務局は、パートナーである岩泉町の森林組合に間伐をしてくださいとお願いします。間伐が行われると、その間伐材をもう一つのパートナーである三菱製紙の八戸工場（青森県）が、通常の間伐材よりも割高な代金で買い取ってくれます。なぜかというと「森の町内会」のプロジェクトを通して、間伐サポーター企業が三菱製紙から割高な紙を買うと約束しているからです。『紙の原料として割高な間伐材を製紙メーカーが買う。だから森林組合は間伐ができる。そして、それを支える間伐サポーター企業が存在する』。この仕組みが「森の町内会」であり、それを私ども「オフィス町内会」が運営しているのです。

「無理のない協力」を前提とした仕組みづくり

もう少し細部についてご説明します。

約10％割高な紙と言いましたが、10％は意外と大きいものです。しかし、実際には10％も割高にはなっていません。印刷物の仕様として、例えばＣＳＲレポートなどＡ４サイズ／32頁／１万部というパターンは珍しくないと思います。この場合、標準的な内容で53万円ほどの印刷代がかかります。印刷代の内、紙代は５分の１程度、約13万５千円ほどです。ですから紙代が10％アップしても、印刷代全体からすれば３％程度のアップになるわけです。大事なのは10％か３％かということではなく、経済性を重視するならば、やはり「無理のない協力」が大切だということをご理解いただきたいのです。そこで、大切な考え方の二つ目に、”無理のある活動は長続きしない“ということを申し上げたいと思います。一時は皆が意気投合してやったのだけれども…というケースを、皆さんいろんな場で経験しておられるかと思います。環境活動もそれと同じですから、そういう意味でも３％程度のアップなら、無理のない範疇におさまるのではないでしょうか。

たくさんの人で賑わったパネル展示

BDFカーで世界一周する山田周生さん（右）と藤井絢子さん（左）

次に、A4サイズ／32頁／1万部の印刷物に間伐に寄与した紙を使った場合、果たしてどの程度の間伐が促進されるかというと、面積にして0.05haの広さです。1haが100m×100mですから、その20分の1、決して狭くはありません。しかし、0.05haの間伐をお願いするのには無理があります。作業する人たちに集まってもらう、トラックを確保する、林業に従事する人たちが経済的に間伐できる最小単位というものがあります。岩泉町の場合も最小単位は0.9haとすることが、一つの約束事になっています。

1万部の印刷物というと結構な量に感じますが、それでは0.05ha分しかないわけで、森林組合の側にすれば、その18倍に当たる0.9haが間伐実施の最小面積。では、そのために必要もないのに18万部に増刷するのかというと、そんな紙の無駄遣いをするために環境活動をやっているのではありません。そもそも1社に20万部近く印刷してくださいといっても意味の無いことです。では「森の町内会」はどうしているのか？　先の3％とともに、ここが最も「森の町内会」たる所以だと言えるのですが、例えばA社が0.05ha分の印刷物でも、F社は0.7ha分の印刷物。こういうグルーピングをしています。数社分の印刷物を合計して、使う紙の量が最小面積の0.9haより大きくなれば、森林組合に実際の間伐をお願いできるわけです。グルーピングをして、それぞれの企業が助け合うことによって、各社とも無理のない活動にしているのです。新しい仕組みを考えるときは継続が大事ですから、無理のない仕組みであるかということが、大きなポイントであろうと思います。

現在、32社の間伐サポーター企業が「森の町内会」を支えてくれています。この2年間で、124種類の印刷物を合計で185万部つくり、110tの間伐に寄与した紙を使っています。それにより、どれだけの間伐が促進されたかというと、2年前の12月から始まって、既に4回の間伐が行われました。面積にして6.93ha、約7haの広さです。この12月に第5回の間伐も予定されています。ちなみに、きちんと間伐された森林は、1ha当たり約7tのCO_2を吸収すると言われていますから、量はまだ少ないながらも、「森の町内会」は約50tのCO_2を吸収する健全な森作りに貢献したと言うことができます。

「信頼」がなければ、新しい仕組みにはならない

少し専門的な話になりますが、岩泉町で間伐された間伐材が、本当に「間伐に寄与した紙」に含まれるかは、定かではありません。「森の町内会」は、これまでに127tの間伐材をチップにして、三菱製紙に納めています。大型トラックで19台分ですから、大変な量だと私たちは感じますが、製紙メーカーの巨大な生産工程からすれば、「森の町内会」の間伐材を投入しても、その間伐材がどの紙のどの部分になったかということはわからないのです。127tに対応できる小さな生産ラインを持った製紙メーカーを探しても、今の日本には存在しません。ですから、この間伐材が必ず含まれる紙が欲しいというのであれば、自分で紙を漉くしかないのです。そんなことは到底無理ですから、私たちは「クレジット方式」という発想をしています。皆さんもクレジットカードをお持ちだと思いますが、お金の替わりになりますよね。クレジットの本来の意味は信用だとか信頼です。つまり「森の町内会」の間伐材が、この紙のどこかに含まれるということ、岩泉町できちんと間伐を行い、三菱製紙で紙の原料に使ったということを、信用しようということなのです。そこに信頼がなければ、新しい仕組みにはなりません。たとえ3%の無理のない協力であろうと、割高なものを使っていただくサポーター企業に信頼していただけるかどうか、これがキーです。ですから三つ目の考え方として、"信頼できる仕組みづくり"が極めて大切だと申し上げたいと思います。

これについて私たちは、「森の町内会証書」というものを発行しています。民間の証書ではありますが、いわゆるトレーサビリティの確保です。岩泉町はいつどこで間伐をしたのか、岩泉町の森林組合はそれを間違いなく三菱製紙に納入したか、三菱製紙はそれを間違いなく原料として購入したか。そういった書類を含わせ、間伐サポーター企業が使っている紙には、岩泉町で「森の町内会」によって間伐された間伐材が入っていることを証明しています。

パネルデイスカッション

BDFカーは大人気。
後部には車載型バイオディーゼル・プラントも

永源寺スギファンクラブ、すてきなフォトスタンド

100名の参加者でした

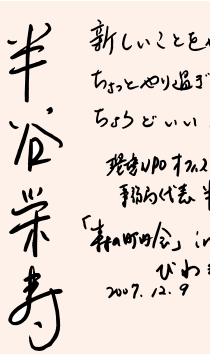
校倉ハウスの会、間伐材を利用しています

目標は「森の町内会」方式による全国レベルでの森林の育成に貢献

新しいプロジェクトを継続して運営するために、三つの考え方についてお話しました。あえて四つ目を申し上げるなら、良いことをやっているところを、〝どのように褒めるか〟です。間伐サポーター企業の印刷物には「森の町内会」のロゴが使用されています。また、「森の町内会」は、林野庁が進めている「木づかい運動」とも連携しています。間伐による森林育成への企業貢献をアピールし、環境貢献活動として意義があるという社会的な評価が行われることが、やはり大切ではないでしょうか。

最後に今後の「森の町内会」の目標ですが、2ステップで考えています。当面の目標は現在32社のサポーター企業を、100社に増やすことです。だいたい100社を集めれば、毎年20haの間伐をするだけのパワーが出ます。100社の間伐サポーター企業で、それが習慣化できればと考えています。そして、次のステップの目標は、それぞれの地域の企業や自治体、あるいは製紙メーカーが、「森の町内会」と同じような取り組みを地元で検討されるのならば、私たちはそれに役立つようなモデルづくり、またはお手伝いをしたいと考えています。もし琵琶湖の周辺で、同じような活動に取り組まれるのであれば、「森の町内会」もぜひそれを応援していきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

琵琶湖にも「森の町内会」をと、半谷氏



●はんがい　えいじゅ＝1953年福島県生まれ。78年東京大学法学部卒業、同年東京電力㈱入社。89年から総務部文書課副長として社内の古紙リサイクルに取り組み、91年に環境NPO「オフィス町内会」を設立、以降、事務局代表を務める。

●森の町内会　www.mori-cho.org
〒105-0004　東京都港区新橋2-16-1　ニュー新橋ビル517号
オフィス町内会事務局内

●びわ湖プロジェクト
http://biwakopro.shiga-saku.net/
滋賀地方自治研究センター「びわ湖プロジェクト」事務局
東近江地域振興局森林整備課（担当／山口）
〒527-8511　東近江市八日市緑町7-23
TEL　0748-22-7718

山の話 あれこれ…の巻

作：村ミヨキ

ある日、「すりっぱ」の名人だった七郎さんが倉に残したオノを…

…えっ？「すりっぱ」って何かって？

「スリッパ釣り」と、ちがいます！

「すりっぱ」とは、丸太を「ぶつり」とは、削る作業のことをいう。つまり、「板木を作る」ということである。

その名人とは、佐々江庄太郎さん。

明治の中期、うまれの人。

佐々江さんは、小学校をあがると、板木の仕事をはじめたそうだ。

あなずれにつれて山へ入る。

原木から、板木に仕上げる作業をまとめた。

決められたサイズにきっちり削らなければならないので、相当に難しい。

道具はこのオノ一本と、

この一本の、計2本のオノだけ。

これらを「ぶつり」ヨキという。

まず原木の丸太を粗く削っていく。

（一本目のオノを使う）

これを「粗こぼき」という。

そして、

「ベタヨキ」という二本目のオノで仕上げます。

そしてやっと一本の板木が完成

ヘロヘロ

一日で10本ほどつくったらしい。

できあがった板木を15本ほどまとめ、トラックに乗せて福井奥の小浜まで運び、

問屋に持っていくと、検査官が一本一本検査をし、等級をつけ、

●オノミユキ（本名 加藤 みゆき）＝1974年生まれ。滋賀県志賀町育ち。1997年に朽木村（現高島市）に移住。朽木の自然、行事、人間などを3冊の本にまとめ出版。現在は2人の子どもを子育て中。

もったいない学会便り

NPO法人手続き完了 海外からの通信を配信

長瀬産業東京本社ビル

もったいない学会（代表・石井吉徳会長、本部・東京）では第16回理事会を、長瀬産業・㈱ナガセビューテーケア（東京日本橋）にて開催した。

出席者は理事・評議員の13名。議題はNPO法人手続き完了報告、海外からの通信のWEB配信、サロン予定が承認された。また、NPO法人化に向けての尽力を評価し、佐藤理事と木川評議員（長瀬産業）の表彰が承認された。

石油生産は2008年が頂点、2010年減少。

理事会終了後、参加者による座談会が行われ、オイルピーク（石油生産がピークを迎える）が2008年に訪れ、2010年には原油生産が減少することを確認。

石油の代替燃料は現時点では見当たらず、製造業・輸送業・企業活動・生活維持における社会的ダメージは計り知れない。この現実を厳粛に受け止め、早い時機での相互助力の必要性を確認した。

また、その対策として、関係各機関へのアピールや、同会主催によるシンポジウム、海外事情のWEB発信などが検討された。

日本の楽観的な認識に危機感

テクノバ・中田理事により、「最近の石油供給に関する情報」が公開された。①サウジアラビアの石油生産は2006年から激減している事実。②産油国の石油の国内消費が急激に増加している事実。③ベネズエラやイラクの生産に頼らざるを得ない事実。④生産計画と需要のバランスが崩れているというIEAの見解。⑤石油生産はあと5年、という海外メディアの反応。⑥諸外国における石油価格の実態（日本は低価格で流通）。

「これらの現実を踏まえ、日本の楽観的な認識に危機感を覚える。今からでは遅いかもしれないが、できるかぎりの手は尽くそう」（石井会長）という声明で締めくくられた。

熱心に聞き入るサロン参加者

「持続経済の創出を」森建司講演

サロン講演が行われ、もったいない学会滋賀支部の森建司氏が講演。

「滋賀支部の活動と21世紀型経営マネジメントの模索」を語った。

講演では、氏が運動を起こした発端と金儲経済の盲点を指摘し、持続可能な循環型社会の必要性に着目。中小企業の特性を活かし消費者の自己責任を尊重した、新たな持続経済の必要性を説いた。中でも〝もったいない・おかげさま・ほどほどに〟という、日本固有の精神の重要性を主張した。

知恵をビジネスにする技術・情報企業・長瀬産業

今回の会場提供は長瀬産業株式会社（本社大阪・東京、代表取締役社長・長瀬洋、連結売上高7013億円、前年対比8％増）。

化成品事業と合成樹脂事業を核としたトップ企業。エレクトロニクス、ライフサイエンス、自動車関連、海外事業の戦略分野で、トレーディング機能、研究開発機能、製造・加工機能を提供している。

ナガセグループの中核企業長瀬産業株式会社は1832年京都で染料卸売問屋として創業。「知恵をビジネスにする技術・情報企業」を目指す、躍進企業。

会場の㈱ナガセビューティケァは化粧品の販売を手がける事業。全国各地でビューティサロンも展開中。

【サロンの予定】

- 2月19日／「脱石油都市交通のあり方」松橋啓介（国立環境研究所、交通・都市環境研究室）ほか。場所＝昭和シェル㈱
- 3月25日／「石油ピーク後の高齢社会における『人の交通権』確立の必要性」小林成基　NPO自転車活用促進協議会
- 4月／「ウォーキング」

詳細は未定。

風格ある家屋、左が庭園

Study society of Kanjinkai

第1回環人会現場勉強会

「かじやの里の新兵衛さん」良かったです

■1月20日（日）

コミュニテイ・アーキテクト近江環人卒業生のグループ「環人会」では、環人会のメンバーが携わる"現場"を勉強する『環人会現場勉強会』を定期的（隔月）に開催。

今回は、第1回「かじやの里の新兵衛さん」（滋賀県能登川／小規模多機能型居宅介護事業所）を見学し、所長の南部直美さんにお話を伺った。環人会コーデユネーターは田中光一氏（東近江市社会福祉協議会所属）。

歴史を記す木版

鍛冶屋の里で田附新兵衛さんのお屋敷を介護に利用

同所は旧能登川町の初代町長・田附新兵衛氏邸を改修し、県下でも珍しい小規模多機能型居宅介護施設として平成18年6月にオープン。所名にある“かじや”は昔の町名を冠したもの。鍛冶屋で栄えた歴史にちなむ。

築180年をこえる家屋は趣きがあり、バリアフリーで開放的。広縁から150坪の見事な庭園が望める。鈍穴流といわれる枯山水が見事。

レイカデア大学の卒業生と地元住民が中心となる“新兵衛を守る会”が中心となりこの庭園を維持している。

「もちつもたれつ」長い目でお互い様の精神を

同所の理念は「もちつもたれつ」家庭的な“終の棲家”を目指す。

「『徘徊』できる町づくりに取り組むためさまざまな仕掛けに挑戦しました。介護と地域の密着を目指し、新兵衛さんを守る会を継続し、お話会や調理会を開催し、一層の交流に努めます。“もちつもたれつ”は協力してくれるスタッフやボランテイアにも当てはまります。彼らの意見を取り入れて補い合いたい」と南部所長はエネルギッシュに語ってくれた。

夢は広がるかじやの里に

また、今後の夢として「登校拒否児を受け入れたい。空き家を利用し、問題を抱える児童の癒しの場になればと思っています」。

高齢者は安心して徘徊し天寿を全うする。子どもは安心して家出ができ、大きく成長する。それを地域の人たちが暖かく受け入れ、見守る。人生の理想郷かも知れない。新たな地域づくりのコンセプトが見えてきた。

金堂地区を散策

勉強会終了後、五個荘商人宅の蔵をおばんざい（町屋のおかず）の店に改装した「楽ごろうえもん」にて昼食。後、金堂地区の町並みを散策した。

鈍穴流といわれる庭園

床暖房を完備、奥の間には縁側があり庭を楽しめる

広い浴室

玄関。右手はギャラリー。中央下は収納式の上がり段。

参加者の感想

参加者は11名。平均年齢35才。大学生3名を含む。見学後の感想を聞いてみた。

「"がじゃの里の新兵衛さん"のどのあたりを説明すればいいか迷っていました。お越しいただいた方から、建物を見て、悩んでいた事の解決策のヒントが得られた。というコメントをいただき、お役に立てたようで大変嬉しく思います」

「現地で体感しながら見聞して、身近なところに活性化のヒントがあることを学びました。普段、何気なく見て感じている事に対して、視点を変えてみる（見る、観る、診る）ことで地域活性化のアイデアが創出できることに気づきました」

「介護はまったく関心もなかった。徘徊って知らなかったし…。古民家と庭園と介護と地域と人が一体となっている現場で、南部さんに知り合えてよかった」

「高齢者の介護、古民家の活用、由緒

樂ごろうえもんにて昼食兼現況報告

ある庭園の管理をどうするか…などのさまざまな地域の課題に応えておられ、頭が下がる思いです。多くのマイナス要因を『足し算』ではなく『掛け算』する事で、『プラス』に持っていく良い事例だと思いました。子どものための施設を構想中とのことで、更なるパワーアップを期待しています」

「私は福祉の分野にまったく無知ですが、南部さんの話を聞いて、グループホームに入所している方が安心して徘徊できるよう、地域に協力を呼びかけて理解を得ておられることに感銘を受けました。数年で社会福祉施設はどこも定員オーバーになる、という状況の中、『地域にこそ可能性がある、しかし、地域で見守ることを呼びかけても結局は施設に任せたい、という結論に至ってしまう』と話されていたところに問題解決の難しさがあると感じました」。

南部所長（左から3人目）を囲んで

第2回は大阪・空堀町「大阪・くねくねツアー」

- 第2回環人会現場勉強会＝「大阪くねくねツアー」
- 日時＝4月13日（日）12時～
- 案内人＝第1期近江環人・笠原啓史
- 内容＝谷町空庭訪問、空堀の長屋再生プロジェクトとの交流、建築工房擽訪問、お屋敷再生複合施設「練」にて懇親会。
- 会費＝4000円（懇親会費含む）
- お問い合わせ＝笠原啓史
  TEL06（6943）1877
  E-mail:raqu@nifty.com

胎教

畑　裕子

イラスト:徳永 拓美

「胎教の大切さを実感したわ」

唐突にそんなことを口にする私の顔を同年齢の知人はまじまじと見た。思わず私は笑ってしまった。彼女の怪訝な顔つきの意味するところがわかったからである。互いに出産年令から遠のき、孫を持つ世代である。

「胎児の超音波による立体写真を見たことがある?」

知人は首を振る。私は六カ月の胎児の立体映像を見た時の衝撃を話す。

「もう、顔の輪郭がはっきりとして、目鼻立ちもくっきり浮きあがっているの」

私の眼に紛れもなく人間として存在している一つの姿が大きく写し出されてきた。心音もリズミカルに聞こえているという。

「人間を始めているということか」

「そうなのよ」

よくぞ言ってくれたと、私は語気を強める。

かつて妊娠がわかった娘に母は言った。

「胎教はとても大切だからね。毎日、心安らかに過ごすのだよ」と。

当時の私は厳しい職場で心身をすり減らし、疲労困ぱいしていた。心の中で、胎教なんて昔の人の迷信だわ、と母の忠告をいい加減に聞いていた。それでも、心のどこかに母の声が留まっていたのか、豊かでない家計を工面してステレオを購入し、モーツアルトやシューベルトなどのレコードを奮発し、その調べに癒されたものである。

今、私は胎教が科学的な見地に基づいたことを胎児の立体写真によって実感している。すでに心というものを内に抱いて未来の人間が羊水に浮かんでいるのだ。妊婦が精神的に安定し、内面的に充実した暮らしを送ることで、胎児の機能や情操の発達によい影響を与えるだろうことは自明である。

人間だけでなく、植物にもこうした考えは当てはまるようだ。ビニール・ハウスの花にモーツアルトの曲を聞かせると花が立派に咲くことを実践して、証明した人もいる。生きとし生けるもの、動植物を問わず、命を持つものに

言えることなのかもしれない。

生まれてから子供が育つ環境も大切だが、すでに胎児の時から人間としての生が始まっていることを、私たちはもっと認識する必要があるだろう。昨年、ベトナム戦争での枯葉剤の犠牲者、ベトちゃんが亡くなったニュースにやるせない思いを抱いた。戦争当時、アメリカ軍が散布した枯葉剤に含まれたダイオキシンによって、ベトナムでは奇形児がたくさん出生した。一九八一年に結合体双生児として生まれたベトちゃんドクちゃんもその犠牲者だった。出生時、兄弟は臓器は別々だが、下半身が繋がっていた。七年後、日本で奇跡といわれた分離手術が成功したが、ベトちゃんはずっと寝たきりで死を迎えたのだった。幸いにもドクちゃんは義足をつけ、元気に暮らしている。

一昨年、彼の結婚のニュースを知った私は心底うれしく思ったものだ。

「最近の妊婦さんは大変ね」

知人は眉をひそめる。

「食料品の毒味をしなければならないものね」

三十年余り前の妊婦は互いにうなずきあう。

女性という同性が呼ぶのか、腹部のふっくらした女性に無意識のうちに視線を向けている自分に気づくことがある。その女性の表情に満ち足りた喜びが感じられると、こちらまで自ずと頬がゆるんでくる。逆に険しい顔つきの妊婦に出くわすと体調がよくないのだろうか、と心配になってくる。老婆心であることは承知の上だが、女性としてエールを送りたい気持ちがあることも確かだ。

私は知人の言葉を再びかみしめる。現代の妊婦の置かれた状況が危険にさらされていることを。

母になる喜びに浸る前に、不安におののくような日々を送っているのであれば、胎教によいはずがない。しかも、その不安が人間がもたらしたものであるとしたらなおさらである。カドミウム、水銀、環境ホルモン…、目白押しに登場してくる有害物質。だが、悲観はしていない。母の強さとそれを支える人々の大きな力を知っているからである。

畑裕子

●はた ゆうこ＝1948年京都府生まれ。奈良女子大学文学部国文科卒業、京都で国語教師を勤める。その後、滋賀県に転居。1993年・第5回朝日新人文学賞受賞、1994年・第14回地上文学賞受賞、滋賀県文化奨励賞受賞。主な著書「画・変幻」「近江百人一首を歩く」「椰子の家」「近江戦国の女たち」など。日本ペンクラブ会員。

徳永拓美

●とくなが ひろみ＝1949年生まれ。日本画を学び、日春展、京展、新興展、滋賀県展に入選を経て挿絵も描く。「いぶきのやさぶろう」(京都新聞社)、「守山の野鳥ガイドブック」(守山市立教育研究所)、「甲賀のむかし話し」(サンライズ出版)、「イルカをおそった黒い波」(汐文社)など。レイカデイア大学「手作り紙芝居講座」講師。

アウグスブルグから
From Augsburg
〈ドイツだより―7〉

原　修子

林真理子氏のエッセイ集に「こんなはずでは…」というのがある。そして辛口のコラムで知られた山本夏彦氏には「あんなにちやほやされたのに」という一文がある。内容は別として、その裏にある思いには共通点があるように思われる。「どうして（こんなことに）?」という戸惑い、思惑違い。

ドイツ人（特に男性）の大好きな玩具は自動車だそうである。周囲のはばかりもあるので、一番目とは言えず、二番目に大事、という人もいるそうである。オールドタイマー愛好家ほどではなくても、結構長年同じ車に乗っている。リースの普及とともに、若い世代は一、二年で車を換える人も増えてきてはいるが、一般的には修理代と新車購入にかかる費用を計算してから買い換えを決めている。その場合の目安の一つとなっているのが、走行距離10万キロである。

車両に対する環境規則

新しい年とともに、ドイツでは新しい法律、あるいは改正された条項が施行された。その内容は環境に関するものから、保険契約を対象とするもの、そしてまた年金関係や、飲食店での喫煙禁止にいたるまで、広い範囲に亘っている。それらの中には全国統一で一月一日から施行されたものもあるが、その適用、内容は地方自治体の権限に委ねられる、というものなど様々である。

環境に関していえば、「環境ゾーン」の設定がある。これはEU指標に沿うよう、自動車の排気ガスに含まれている有害物質、浮遊塵、煤による大気汚染を減少しようと、特に大都市と近郊地区に触媒のタイプによって自動車の乗り入れを許可したり、禁止するものである。「環境ゾーン」は、交通標識で表示される。触媒タイプは、EU基準に基づき四等級となっており、対象車種は、自家用車、営業車、トラック、バスであり、燃料はガソリン、ディーゼルである。対象外となっているものには、二輪・三輪自動車、農業・営林用牽引車、また医療用、登録されている障害者用の自動車、警察、消防、軍関係の自動車も勿論対象から外されている。

違反した場合には、罰金が科せられ、交通違反点数一点が記録される。この規則は外国で登録されている自動車にも適応される。施行時期や方法、対象地区、そして罰金の額も、該当する地方自治体に決定権がある。

ベルリン、ハノーヴァー、ケルンの三市は既に一月一

日から実施しており、引き続いてマンハイム、イールスフェルド、レオンベルグ、ルードヴィッグスベルク、シュトットガルト、シュヴェービッシュハレ、テュービンゲン、ロイトリンゲンが三月一日から、そしてアウグスブルク、ミュンヒェン、ウルム／ノイウルムは今年後半に施行する予定である。

しかし、おびただしい車、一台一台がどの等級に属しているのかを外見だけで識別することは不可能である。そのために考えられたのが、一種のシールである。シールは直径八センチメーターの円形となっている。そして車体の目につきやすい場所に取り付けることが推奨されている。等級が一目で分かるように、赤、黄、緑と色分けされており、円内には等級を表す数字2～4が黒字で、そして長方形の白地の中に登録自動車ナンバーが記入されている。赤が2、黄色が3、そして緑が4となっている。数字はEUの触媒基準であり、赤が可、黄が良、緑が優という感じとなる。そして等級により乗り入れられる地区が制限される。

四等級に分かれていると言いながらシールが三種類しかない。つまりシールを付けていない自動車は、全く基準を充たしていない自動車となり、このような車は環境ゾーンへの乗り入れは全面禁止となる。

過渡期の猶予期間をもうけながら、段階的に実施されてゆくこの環境ゾーン規則。本当に大気中の有害物質減少に役立つのかどうか、疑問の声もある。ドイツの自動車クラブADACは自家用車を所有する一般人が会員であり、彼らの利益を代表している。まずこのような対策が効果を上げたかどうかを知るには、長期にわたる観測が必要であるとしながら、自家用車が排出する浮遊塵は僅かなものであり、このような規則は一般市民の行動性を狭めるものとなる。それよりもトラックとか搬送車のような営業車が大都市近郊地域ではより大きな大気汚染の原因となっているものであるから、これらの車の改良を推進する方が効果的である。市民の環境意識も高まってきており、彼らは自動車を購入するときには、環境に優しいという点を考慮するようになっている。またかつてスモッグ対策として自動車の使用を禁止した時の例が示しているように、このような規則を実施するには例外条件を決めなければならないが、それがなされていない、と主張している。

（最初はチャンスの無かったオールドタイマーは、昨年十二月八日の改正で前提条件をみたせばシールをもらえることになったが、それでも環境ゾーン規則が全面的に実施された暁には、長年親しんだ自動車に別れを告げなければならない人たちも出てくるであろう。その時持ち主と車は「こんなはずでは…」、「あんなにちやほやされたのに」と嘆き合うのであろうか?）

●はら　しゅうこ＝徳島市出身。1972年よりドイツアウグスブルク市在住。國學院大学文学部哲学科及びアウグスブルク大学カトリック神学科卒業。職業、通訳。翻訳。

〈商家の家訓の話　第五回〉

矢尾喜兵衛の所感(三)

正直と薄欲

Tha story of the famiry precepts of the merchar's family

末永 國紀

矢尾喜兵衛家が出店した秩父の夜祭りの山車

およそ人間の欲望ほど際限の無いものはない。欲望ゆえに身を焦がし、それが極端になると破滅にいたることは、個人であれ、家であれ、国家であっても同じである。商いは、営利を目標とするだけに、絶えず欲心を刺激される状況に会することが多いであろう。それは、商いが常に欲望にもとづく危険に曝されているということでもある。

商家の願いは、家業の永続である。日々の生活においては、欲心をかきたてる利益を目指しながら、なおかつ家の永続を祈るには、欲望のコントロールが必要になる。そのコントロールが外れた結果としての奢りを防ぐために、勤勉・始末が強調され、一時の損得に一喜一憂しない経営の長期的視点が重視されるのである。

四代目矢尾喜兵衛は、嘉永六年（一八五三）秋に記した所感のなかで、家業永続の基としての考えを次のように述べている。

先ず、時世の風潮を批判しながら

農工商それぞれに本来の職分を尽すことが国益に叶い、家内長久の基になると主張している。昨今の世の習いは、金儲けさえすれば身代は良くなって家も長久するように思っている人が八～九割もいる。しかしこれは間違いであり、全くそのようなことはない。

百姓は、世間のため国のためになる有用な作物をたくさん作り出すからこそ天職であり、それが冥加というものである。欲得から初茄子一つに金一分というような高価なもの、奢侈にかかわる高値の品物ばかり作り出す農家は農民の天職を汚すものである。百姓の本来の冥加を弁え、耕作を大切にする農家は子孫も長久するものである。

職人も国家の実用に役立つ品を作り出すように努めるならば、天意にも冥加にも叶うであろう。それなのに、無益な何の用にも立たない奢侈の者が玩ぶだけの高価な品を作り出すのは、たとえ人目を驚かすほどの腕の職人であっても、人々を奢侈に趣かせるだけであり、安価な国家の役に立つ品物を作る国用の職人にはるかに及ばないものである。

商人については、二種類に分けて論じている。国家の実用の品を商売する者を上商売人と呼び、そのような商人は利も薄いが天地の意に背かない商家なので、子孫繁昌して家内長久のきっかけになるような商人である。しかし一方、百人の商人中八〇人は、何の役にも立たない無益の品を売り出す無国用の商人である。なかには、世上の人々を奢侈に引き入れる商人や、善人を不善人にするような商人もいる。すなわち、人を煽てて私欲に耽る物好きに仕立て、詰まらないものに大金を投じさせ、それを誉めそやしてますますへんてこな人間にしてしまうような商人である。

元来、商人というものはお客から商品の価格に応じてお世話賃として口銭をいただき、そのお蔭で一家や奉公人を養い育てているのである。それだから、品物をよく吟味し、もし品質が悪ければ値段を下げて口銭もできるだけ薄く売り、一度入来したお客が喜んで再訪したくなるように仕向けるのが大事であり、正直と薄欲の二つを常に忘れないようにすることが肝要である。

このように喜兵衛は述べて、日常的に利益に接する商家であるがゆえに、正直ということと薄い欲心ということを心掛けることによって、欲望をコントロールし、家業の永続を図ったのである。

近江商人に学べ

末永國紀

●すえながくにとし＝1943年生れ。同志社大学経済学部教授。経済学博士。（財）近江商人郷土館館長。著書／『近代近江商人経営史論』（有斐閣）、『近江商人』（中公新書）、『近江商人学入門』（サンライズ出版）

〈MOH-ECOTOURISM−8〉

ツーリズム最前線−高島トレイルへの期待

檀上 俊雄

生態系が維持されたブナ、ミズナラ、アシウスギの混生林の深い森の中を、若狭から京の都へ歩荷して鯖を運んだ先人を思い描きながら歩くのは楽しい。写真は胴まわり約4.5mのトレイルーのブナの巨樹。駒ヶ岳にあり、横に立つのはびわ湖高島観光協会事業課長吉田正司氏で、トレイル協議会副会長も兼務する。牽引役が現場をよく知る人であることは願ってもないことだ。

安曇川をはじめ、いくつかの川の河口から水源までを市域とする高島市は、京の都に近く、日本海交流の豊かな歴史と、恵まれた自然環境をフィールドとしたエコツアーの大きな可能性を持つ地域である。さらにメタセコイア並木を育てたマキノ高原、琵琶湖周航の歌を伝える今津港、鯖街道を彩る朽木朝市等にみられるような、自然と歴史を活かした手堅い観光ノウハウも持つ。

こうしたなかで、5町1村が合併してできた高島市のシンボルとして、中央分水嶺・高島トレイルが2007年に誕生した。地元主導で今春から行なわれるトレイルツアーは、こうした地域特性をふまえて、新たなエコツアーを作り出すこととなる。登山やトレッキングはただ歩くだけではなく、食や宿泊、そして文化も含めて観光の要素をすべてを合わせ持つ旅であり、一度訪れた人はリピーターとなる確率の高い良質の客といえることから、観光面への波及効果も大きいものがある。

さらにトレイルによって多くの人が知ることになる琵琶湖水源や中央分水

嶺に残る豊かな自然は、流域で育てられた食べもの、木材、特産品から、それらを取り扱う商業の面まで、その好ましいイメージを付加する。トレイルを歩く登山者が地元のもてなしから特産品の素晴らしさを知り、口コミという最も確実な方法で多くの人へ広められる。そしてこの流れは住む人の誇りとして積み重なってゆき、観光客への心を込めたもてなしとして再発信されることになる。

このトレイルは、街の人と地元の人をつなぎ、観光資源や既存の施設をつなぎ、過去から未来をつなぎ、それはあたかも体の血管のように、酸素や養分を地域全体へ送るという役割を担うものになるだろう。

さらに地域活性化の面ばかりではなく、物質的には豊かではあるが閉塞感に充ちた現代社会において、この自然の中のひとすじの道は、多くの人を癒し、環境としての自然は無限の可能性を生み、健康で有意義に生きる上で必要なエネルギーを与える。高島では今日でも旧きよき時代からの地域コミュニケーションが健在であり、旅人をあたたかく迎える伝統が残ることは、その追い風となる。

またこのトレイルの出現によって、水源から河口までの市域の隅々まで、だれもが自らの眼で現状を知ることができるようになった。このことはあたりまえのようで、実は全国でもこうしたエリアを持つ市町村は多くはない。

こうした自然特性は観光や環境ばかりではなく、地場産業、農業、漁業等においてもメリットが大きいことは注目すべきだ。上流、下流の住民が同じテーブルにつき、足並みをそろえて取り組めば成果は目に見えてあらわれ、大きな成果を導き出す可能性が大きい。

2007年10月27日、28日に、マキノ高原をメイン会場として、日本トレッキング協会と高島市の共催で、全国トレイルサミットが行なわれた。中央分水嶺・高島トレイル開通を記念して、川嶋辰彦会長（学習院大学経済学部教授）による「トレイルによる地域活性化」の基調講演をはじめとし、シンポジウムとトレイル紹介が行なわれ、市をあげて取り組む姿が全国全国に発信された。

花崗岩地帯の明王ノ禿に設置された高島トレイルの標識。これが主要ポイントである12山12峠に設置された。あわせて主な分岐の道標やトレイルマップも作られ、完歩という目標を持って歩く人へのエールと安全への祈りが込められている。トレイルの随所から琵琶湖と若狭湾が望め、中央分水嶺歩きの醍醐味が味わえる。

現在、地元山の会、山裾の野外施設、観光協会及び市商工観光課などからなる、高島トレイル運営協議会（整備委員会から仮開通を機に改組、会長はマキノ高原観光支配人前川正彦氏）が中心となって、加盟団体と共に様々なツアーを行なう準備が進められているが、中央分水嶺において人と自然の共存共生をめざし、その持続可能な利用ができるよう次のようなトレイルガイドラインを定めている。

中央分水嶺の豊かな自然を守り、優れた歴史的文化を伝えてゆく。

水源の森であることを誇りとし、その保全と発展に努める。

人と人のつながりを大切にし、多くの出会いを通じて地域の活性化に貢献する。

現在のところ、山仕事の道やケモノ道を繋いだばかりであり、地図を読むことができ、登山に慣れた人が歩ける状態といえるだろう。安全面からの整備はさらに必要であるが、自然と人の共存、共生という目的からすれば、人が歩くことが可能な必要最小限の道をめざすべきことは明らかだ。

道づくりを進めるにあたっては、中高年登山者の遭難急増という全国的な状況から、歩く人に向けての安全登山の啓蒙活動は不可欠となる。これを受けて市が中心となって道標を設置し、トレイルマップを作った。さらに地元精通者が案内する快適で安全なガイドツアーを利用してもらう方向で、登山者を誘導しようとしている。

また拠点施設の受け入れ態勢、登山口への送迎、トイレや休憩所、地元食材を使った弁当、下山後の道の駅や特産品販売所などへの立ち寄り、温泉入浴、宿泊施設などへの誘導など、日帰りから宿泊プランまでの旅としてコーディネートされて始めてトレイルでのツアーが可能となることから、地元関係者、各施設への働きかけも余念がない。

トレイルの動きと歩調をあわせるかのように、旧町村ごとの観光協会が合併して、びわ湖高島観光協会としてスタートした。それはトレイル運営協議会と車の両輪のような関係であり、フル稼動するようになればトレイルによる地域活性化は大きく具体化することになる。

運営協議会では、市民向けの月例会を行なう。そもそもはトレイル維持管理とトレイルを広く知ってもらう目的だが、同時に地元ガイドの養成、事故対策、さらにツアー誘致先の担当者やマスコミへのPRも兼ね備えたものにしようと企画されている。トレイルによる地域活性化は結果を出すことはもちろんだが、プロセスをオープンにする進め方は、だれにも取り組みをわかってもらうことによってその気運を高めようという考え方からだ。一年がかりとなるが80キロのトレイルを完歩する人がどれだけ現れるか、今後を占う上でも注目される。

檀上俊雄

●だんじょう　としお＝1951年広島県尾道市生まれ。立命館大学文学部地理学科卒。山と自然研究会青山舎代表。日本旅のペンクラブ会員。
著書／「比良山・湖西の山」山と渓谷社（共著）

講演日記

A lecture diary

皆様のご支援でたくさんの講演依頼を頂きました。11月～2月の講演をダイジェスト版でお知らせします。

滋賀エコ・エコノミーフォーラム

エコ・エコノミーフォーラムパネルディスカッション

- 日時：平成19年11月16日（金）
- 主催者：滋賀経済同友会
- テーマ：エコ・エコノミープロジェクト
- 場所：琵琶湖ホテル
- 参加者：100名
- パネラー：森建司

長浜市小学校教育研究会環境教育部会研修会

- 日時：11月27日（火）
- 主催者：長浜市小学校教育研究会環境教育部会
- テーマ：eプラザ見学、「持続可能型社会をめざして、もったいない（抑制）・おかげさま（共生）・ほどほどに（抑制）」
- 場所：新江州
- 参加者：10名
- 講師：森建司

滋賀県立大学政策形成・施設演習2007

- 日時：11月29日（木）
- 主催者：滋賀県立大学環境社会計画専攻
- テーマ：循環型社会形成へ向けての民間企業の取組みを学ぶ
- 場所：新江州
- 参加者：50名
- 講師：森建司

東近江市環境セミナー2007

- 日時：12月15日（土）
- 主催者：東近江市環境セミナー運営委員会
- テーマ：「もったいない・おかげさま・ほどほどに」
- 場所：東近江市役所別館
- 参加者：50名
- 講師：森建司

MOH通信執筆者懇談会10

- 日時：12月17日（月）
- 主催者：MOH通信
- テーマ：皆様の活動報告と19号20号検討
- 場所：草津梅の花
- 参加者：10名

もったいない学会第1回理事会・座談会

- 日時：12月15日（火）
- 主催者：もったいない学会
- テーマ：石油ピーク2008年以降の予想と対応
- 場所：東京大学工学部
- 参加者：10名

もったいない学会にて

ことしん経営塾

- 日時：1月23日（水）
- 主催者：湖東信用金庫
- テーマ：新江州の多角化戦略
- 場所：八日市ロイヤルホテル
- 参加者：70名
- 講師：森建司

もったいない学会「サロン講演会」

- 日時：1月22日（火）
- 主催者：もったいない学会
- 場所：ナガセビューティケア
- 参加者：16名
- テーマ：滋賀支部の活動と21世紀型経営マネジメントの模索
- 講師：森建司

滋賀地方自治研究センターニュース座談会

- 日時：2月1日（金）
- 主催者：滋賀地方治研究センター
- 場所：滋賀県教育会館
- 参加者：60名

「すこやかセミナー」

- 日時：2月8日（金）
- 主催者：南笠東学区青少年育成学区民会議
- テーマ：将来の社会に残すエコロジー～MOH通信の取材を通じて～
- 場所：南笠東公民館
- 参加者：60名
- 講師：辻村琴美

セツブンソウ

三山 元暎

さし絵：中川 善雄

伊吹山の雪解けがはじまるころ、山麓の段々畑の土手に、いち早く顔を見せるのがセツブンソウだ。節分のころから咲きはじめるので名づけられたのだろうが、この地ではかなり遅れ、二月末から三月はじめにかけて咲く。

まだ名残りの雪があるなか、地肌が現れたところにはうように茎をのばして次々顔をのぞかせる。はずかしげに、枯れ草に身を寄せるように、ややうつむき加減に咲いているものもある。咲いてはみたが小雪が舞う冷たい風に身をさらして震えているものもある。

一見、細くていかにも弱々しく見えるこの白い花は、凍土を突き破る生命力が秘められている。あまり陽の当たらない石灰岩地に、なんとなく近寄りがたい気品を備え、人目を避けるようにひっそりと咲くことが多いせいか、花ことばは「人間ぎらい」である。

節分草の風に揺るるときさみし
青柳照葉

咲くだけの光あつめて節分草
高橋悦男

三月に入っても、ここ伊吹山麓の地は、凍てている日が多い。しかし光のほうは次第にまぶしさを加えていく。この光の春をさぐるようにセツブンソウに続いて、小さななんとも可憐な花を咲かせるキバナノアマナや純白の花が美しい雪割草の別名をもつミスミソウが出番を待っている。

三山元暎

●みやま もとあき＝1940年滋賀県坂田郡山東町（現・米原市）生まれ。長浜市の理事・経済部長を経て1995年8月から2005年2月まで山東町長。同月14日米原市誕生にともない退任。真宗大谷派真勝寺住職。

●なかがわ よしお＝1936年生まれ。滋賀県展、長浜市展、伊吹を描く絵画展など入賞、入選歴多数あり。税理士。

本の紹介

最近入手した、気になる本をご紹介します。

BOOKS

地球の心はなに思う

●編者／日本児童文学者協会
●発行所／新日本出版社
●価格／1900円＋税
●内容／日本児童文学者協会創立60周年記念おはなしのピースウオーク5。今関信子著「地球の心はなに思う」を掲載。石庭美和作画。

田舎でスローライフを極める

●著者／清木たくや
●発行所／学芸出版社
●価格／1600円＋税
●内容／著者は先端技術から田舎暮らしまで、多様な分野を取材執筆するジャーナリスト。みずほ総合研究所「Ｆｏｌｅ」誌の連載をまとめたもの。農村、漁村、山村であらたな人生を切り開く生き方の達人16名を紹介。

ACT4・20号

●編集長／佐藤眞理子
●発行所／インプレザリオ
●価格／1500円
●内容／大人のための知的好奇心マガジン・アクト4。今回は「OHMI日本の憧憬を往く近江」近江の見所を女性の感覚で美しくとらえている。木村至宏氏、嘉田知事、井伊亮子氏、招福楼女将、瀬古篤子氏、ミホミュージアムなどを紹介。

中小企業にしかできない持続可能社会の企業経営

●著者／森建司
●発行所／サンライズ出版
●価格／945円
●内容／「金さえあれば何でも買える」は錯覚だ。人間と自然が共生し、生産者と消費者が一体となる持続可能社会を創るキーワードは「中小企業」。

にゃにゅにょカレンダー2008年

●発行／びわこ学園後援会
●内容／びわこ学園医療福祉センター野洲の利用者による、陶芸作品が13点掲載されている。縄文式土器に似たパワフルなパワーがあふれる。

言葉とともに

●著者／中井和平
●発行所／サンライズ出版
●内容／教職三十四年の著者が還暦を迎えてまとめた書。厳選した随想・随筆六十三編が言葉・国際関係・生活・教育のジャンルに分けて記されている。

日本の精神

Japanese mind

「人間の学」（森信三先生著）を読む

その二

Study of " Human nature" written by Professor Shinzo Mori

井上 昌幸

今回も第一部「生き方」の基本から大切な箇所を抜粋していきます。

五．物事をつづける工夫

○決心と覚悟

・人間の中にある「いのちのローソク」に火をつけること。

・本当の決心ができれば、一つのことだけに限らず、やろうとする他の色々なことにも応用が利くようになります。

○工夫のこつ

・最初の目当てとしては、最低三日間ガンバルのです。つぎに四日間で一週間となり、つぎに三日続けたら十日となり、十五日、二〇日をめざし、一ヶ月つづけたら自信がつきます。

・このように、人間も一つの事を百日間ガンバリぬきますと、確実な足場ができますから、それから後はたいへん楽になります。

・その後、半年、一年、三年、五年、十年とつづけられて、あなた方にとって、人間としてもっとも大事な土台となることを信じてうたがいません。

「継続は力なり」とよく云われますが、現実には三日坊主になってしまうことが日常茶飯です。私はこれと言って取り得もないですが、続けることは苦にならない方で、詩吟も三十三年間続けています。それは初心貫徹と申しますように、最初に「やるかやらないか」の二者択一をしっかり決めて、決めた以上はやるんだという意志を持つことでは

ないかと思います。

六．腰骨を立て通す

○つねに腰骨を立てている人間になる。

・人間がいったん決心した以上、かならずやり抜く人間になるには、けっきょくこれ以外にないと思うのであります。

○身・心相即の理

・われわれ人間というものは、身体をシャンと立てていますと、心もしぜんにしっかりしてくるからであります。しかしこのことは、不思議なようでけっして不思議ではないのです。それというのも、われわれ人間の心とからだとは、つねに一つになっていて離れないのが、本来のすがただからです。そしてこのことを、むかしから「身・心相即の理」と呼んでいるのであります。

○その要領の伝授

・まずみんなお尻をウントうしろに突き出して下さい。そして次には腰骨を、反対にウント前へ突き出して下さい。次には下腹のおへその下（丹田という）にも心もち力を入れて下さい。

椅子に座った時、下腹を少し前に出して腰骨を立てると自然に背筋が伸びます。禅寺で坐禅をする時にはこの姿勢が基本であり、ゆっくり呼吸をしますとおへその下十センチあたりがかたくなるように感じます。椅子に座った時などには意識して実践して見て下さい。

七．人に親切な人間に

○人間として大事な二ケ条

・一たん決心した以上は、必ずやり抜く人間になるということ

・もう一つは、人に対し親切な人間になるということ

○親切な行い――席をゆずる

・森信三先生は七十五才を過ぎても、子供を抱いた女の人と、足元の不確かなお年よりの方が乗り込んで来られますと、バタッと本をふせて必ず立ち上がり、「サアどうぞ」と席をゆずることにされていた。

・乗り物に乗ったさいには、相手のいかんにかかわらず、できるだけ「席をゆずる」ように心掛けていただきたいと思うのです。

○親しき友をもつこと

・「親友」をもつことが望ましいわけであります。この大事な交友関係を永くつづかせるためには、お互いに自分の都合を第一にしないで、なるべく相手の立場を主として考える心がけが何より大切だと思います。

・論語の中に、子貢が孔子さんに「その一言を守ってさえおりさえすれば生涯間違いはないという奥の手はありませんか」とお聞きしたら、「それ恕乎（じょか）」（わがことのように人のことを思うことだろう）と答えられている。

人間にとって一番大切なことは「思いやり」を持つことでしょう。

中江藤樹先生は村の人たちに次のような「五事を正す」ということを教えられて、村人たちはいつもこの言葉を省みていたと云われています。

「五事を正す」

貌・・・なご和やかな顔つきをする

言・・・思いやりのある言葉で話しかける

視・・・優しいまなざしでものごとを見つめる

聴・・・耳を傾けて人の話を聴く

思・・・まごころこめて相手のことを思う

私たちも寝る前にこの五つが実践できたかどうか省みてはどうでしょうか?そしてそのことを習慣化できればしめたものです。三ヶ月も続けたら他人から見ても変化が見られるでしょう。自らが変われると思って是非続けてみて下さい。

井上昌幸

●いのうえ まさゆき＝1940年1月1日生まれ。現在、滋賀県異業種交流連合会会長、STEP21（滋賀県シニアテクニカルエンジニアリングパートナーズ企業組合）専務理事、関西師友協会活学塾講師、大津木鶏クラブ代表世話人、近江素交会代表世話人
〈資格〉ISO14000&9000審査員補

M·O·H 読者の声

読者の方からお便りをいただきました。ご紹介します。

★「わーんと泣いた」。昔は他人の子も自分の子と同じ気持ちで接していたなア、との思い出で読みました。気持ちが暖かくなりました。

棚原 八重子（55歳、沖縄）

★こんにちは、京都在住の加藤和子と申します。去年「権座」でお会いして以来ご無沙汰しております。先週大津某所にて出来立てホヤホヤのMOH通信を入手（略）ヒートアップされてどの記事も読み応えたっぷりです。（略）とりわけ「どちらを選ぶ?」はドキッとさせられました。必読と思います。多くの方にお知らせしてともに悩みたいです。これからも楽しみにしております。

加藤 和子（京都）

★九州まで取材されたり阪南大学の学長と森会長が対談されていたり盛りだくさんの内容で読み応えがありました。特に内藤先生の「自然共生型社会」と「高度経済型社会」を対比している記事には考えさせられるところがありました。環人会は勉強させていただきます。

辻 勝郎 （滋賀）

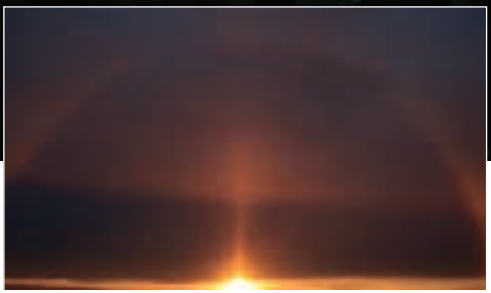
★中小企業家新聞にて拝見しました。よろしくお願いします。

吉田 徳夫（新潟）

★「本当に地球にやさしい社会を」、と題して内藤先生とMOH通信を『中小企業家新聞（平成20年1月5日号）・最近読んだこの一冊から』コーナー、で本間工業・本間義典社長が取り上げて

アラスカ便り

福田 正己
アラスカ大学国際北極圏センター教授



「サンピラー」光の石つぶてが美しい

「オーロラ」夜空にたなびく光のカーテン

◆1月1日「サンピラー出現」

こちらフェアバンクスでは、穏やかなお正月です。あまり冷え込まずせいぜい−25℃です。今日の午後にはきれいなサンピラーが現れました。気温が−20℃位で大気中にダイアモンドダストが多数浮遊して太陽の位置がちょうど良いと、サンピラーが出現します。

※太陽柱（サンピラー）出典：フリー百科事典『ウィキペデイア（Wikipedia）』
太陽柱（たいようちゅう）とは、日の出または日没時に太陽から地平線に対して垂直な方向へ焔のような光の光芒が見られる大気現象のことである。サンピラー（Sun pillar）ともいう。

◆1月29日「オーロラ！」

寒中お見舞い申し上げます。先週弱いながらオーロラが現れました。そのときの気温は−38℃でした。

ください。ありがとうございます。

編集部より

★先日の「もったいない学会」では森先生より役に立つ、面白いご講演を伺うことができ、ありがとうございました。購読申し込みをいたします。

山下 浩三（東京）

★2月2日のシニア自然大学の後援会で、内藤正明先生が講演をします。MOH通信18号を販売します。

KIESS 武井 政子

★ダンボールコンポストの講演会でMOH通信18号を販売します。

循環生活研究所
たいら 由似子

★もったいない食堂にてMOH通信18号を販売します。

テイア 副社長 森川

（敬称略）

「循環型社会を目指す～M·O·H通信～」の発行に当たって

代表　森 建司

20世紀型社会は経済至上主義の時代であった。科学技術の進歩とそれに伴う工業や流通の発展は、世界的なスケールで人々に物による恩恵をもたらしたが、同時にバランスのとれた自然との共生社会を破壊した。経済至上主義とは物の豊かさを最高の幸せとして捉え、その対極にあるものの価値をほとんど消し去ろうとするものである。人々の価値観を情報操作で画一化して、特定のものに集中させようとするマーケット戦略は個人の人生観、社会観にまで侵入し、その独自性、不可侵性まで奪って行った。このことによって人々は哲学的な意味の自己をなくしてしまった。

今こそ新しい時代として循環型社会を作ろうとしているわれわれは、自己を証明する、こころとか思いを取り戻さなければならない。死生観とか人生観、先祖とか子孫、生涯をかける志、自己を自己らしく生き抜くための人生哲学など。そしてそれは自然との共生社会を目指すものであり、人としての真の生き様を問うものであらねばならない。

この実現のために

「循環型社会を目指す～MOH通信～」を発行する。

《 MOH通信概要》

■目的

(1) 循環型社会構築に向けた意識改革
(2) 浪費型社会通念の脱却
(3) 人生哲学を学ぶ

■事業

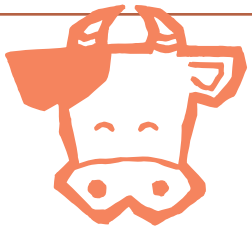
(1) 通信の発行及び出版
(2) 講演会、勉強会、シンポジウムなどイベントの開催

■会費

(1) 通信購読料　年間3,000円
(2) 入場料徴収 随時
(3) その他

■事務局

〒526-0111 滋賀県長浜市
川道町759−3
循環型社会システム研究所
TEL.0749-72-5277
FAX.0749-72-8681
e-mail:tsujimura@shingoshu.co.jp
代表:森 建司
担当:辻村 琴美



「M·O·H」のマーク＝牛

牛は環境の象徴ともいえます。牛糞はメタンガスになり、肥料にもなります。大地を作り、食物を育て、生物を養います。私たちは命の源ともいえる、牛を「MOH」のマークとし、循環型社会の象徴とします。

★MOH通信の役割★

持続可能で豊かな循環型社会を築く社会人の意識を向上するためMOH通信は情報を発信し交流を続けます

M 循環 →もったいない　他の生命を奪って得たものを使わせて頂く

O 共生 →おかげさま　人は一人では生きられない、環境によって生かされている

H 抑制 →ほどほどに　欲はほどほどに、良き環境を作り上げるために

M·O·Hニュース
MOH news

【滋賀県トキ復活プロジェクトチーム・松田千春】
■トキ復活プロジェクト滋賀『再びトキが舞う滋賀の空を目指して』トキシール完成。シーボルトが持ち帰ったトキの剥製が滋賀産（日野町）であったらしい。琵琶湖環境科学研究センターの内藤センター長の発言をきっかけに、滋賀県庁内に「滋賀県トキ復活プロジェクトチーム」が発足。トキ保護増殖事業計画とトキの分散飼育を計画中。トキが生息できる自然環境を作り出そう。

【京都新聞より抜粋】
■温室効果ガス県内排出量2030年までに半減目標。バス交通システム導入、自転車道整備・・・ビジョン素案滋賀県環境審査小委員会が了承。90年度比651万トンに抑える。
■学園祭やイベントリユース食器利用ごみ減量に効果。導入の動き広がる。高コストなど課題も。（11／27）
■「持続可能な豊かな社会大人の責任で築こう」深夜まで開店しているショッピングセンターに、眠い目をこすりながら買い物についてくる、秘められた子どもの気持ちを親は受け止めているでしょうか。
（環境市民　風岡宗人）
■なつかし「おくどさん」復活。南丹後の男性、移動式に改造。地域イベントで人気。（12／5）
■「練馬大根」「大阪しろな」京都に負けぬ都市野菜活況（12／6）
■障害者職業技能五輪、草津の男性初出場。努力結実精密板金で銅メダル。勤務後特訓続け、次は一位を。（12／13）
■温暖化対策欧州委員案、企業負担年9兆円、排出枠有償化日本にも影響（1／24）
■　2050年CO2排出量450億トン削減、革新的技術開発で政府が試算05年度の約半分に（1／25）

【ウエッジ2号より】
■アウトサイダー・アートの新境地『滋賀から世界への発信』。「知的障害者福祉の父」として知られる糸賀一雄氏が設立した近江学園では、早くから職業教育として障害者の感性を活かした陶芸活動が行われている。全国でも例をみない先駆的な取り組みだ。滋賀県社会福祉事業団が運営するNO-MAは公共ミュージアムとしてさまざは公共ミュージアムとしてさまざまなボーダーを越え「人のもつ表現の力」を展示し伝えてきた。
このほど、2月28日～5月11日まで「アール・ブリュット／交差する魂」と題した作品展を開催するローザンヌ　アールブリュットのコレクションと日本のアウトサイダーアートのコラボレーション。問い合わせはボーダレス・アートミュージアムNO―MA（のーま）。滋賀県近江八幡市永原上16.月曜休館。☎0748（36）5018。

《次号予告》
2008年5月発行予定

■特集:文化
- ●対談／成安造形大学木村学長＋森建司
- ●インタビュー／「滋賀の原風景を壊すな」ブライアン・ウィリアムズ
- ●インタビュー／「環境文化職人」岡靖敏
- ●取材／「企業のCRSを探る」アストラゼネカ
- ●寄稿／「地域の学びを活かす滋賀の企業」弘中史子
- ●連載／通常通り

※ 予告なく変更いたします

編集後記
editing voice

今号は、稚拙ではありますが、近江環人で学んだ事を表現しました。
お役に立てば幸いです
MOH通信で出会った方が、動き出しています。今号の紹介に加えて「コムケア」と「びわ湖トラスト」が新たに発進します（琴）。

〈訂正〉17号60ページ1段目の写真説明「自然食を味わえるカフェ」を「自然なふいんきで味わえるカフェ」に訂正いたします。

《M·O·H通信》購読受付中！

あなたも「M·O·H通信」を購読しませんか。特典として、M·O·H通信、講演会のご案内をいたします。活動やこの通信についての、ご意見もお聞かせください。

あなたのお名前、年齢、郵便番号、住所、電話番号、fax（あれば）、e-mailアドレス（あれば）、あなたの心に残った一言をご記入の上、お申し込みください。通信をお送りします。申込書をfax、郵送、mailでお送りください。

《M·O·H通信》購読申込書

フリガナ		年齢	希望口数
お名前			1口=3,000円
住　所	〒		

電　話	FAX	メールアドレス

あなたの心に残った一言、MOH川柳をお書きください。

※記入いただいた内容については、目的以外のことに使用または転用はいたしません。

キリトリ線

M·O·H通信　Vol.19（通巻20号） 2008年2月末日発行　発行部数4,500部

●編集・発行/新江州（株）
循環型社会システム研究所
M·O·H 通信編集局

代　　表　森 建司
編 集 長　つじむら ことみ
編集協力　稲垣 重雄
村山 明子
寺川 智美
東良 真紀
取　　材　細井 美保
デザイン　伊達デザイン室
写　　真　辻村写真事務所
平田尚加
北條正明
印　　刷　新江州（株）情報C
ブ ロ グ　松崎 和弘

●ご協力
滋賀県
琵琶湖環境科学研究センター
（社）滋賀県社会福祉協議会
高島市
［執筆者懇談会］
内藤 正明　山口 美知子
海東 英和　堤 幸一
下西 康嗣　進 ひろこ
末永 國紀　中村 誠
花田 眞理子　奥山 武生
弘中 史子　結城 美枝子
今関 信子　松崎 和弘
山崎 隆　井上 昌幸
三山 元暎　辻村 耕司
加藤 みゆき　佐々木 洋一
笹山 千怜　畑裕子
清水 安治　徳永拓美
檀上 俊雄　中井二三雄
（順不同、敬称略）

●支援
新江州（株）
〒526−0111
滋賀県長浜市川道759-3
TEL.0749-72-5277
FAX.0749-72-8681
★ブログ　滋賀・咲くブログ★
http://moh.shiga-saku.net/
★ホームページ★
http://mohmoh/jp/

［購読費振込先］
M·O·Hの会　代表　森 建司
●滋賀銀行 長浜支店 普通　136987
（モウノカイ　ダイヒョウ　モリケンジ）
●長浜信用金庫 本店 普通　0577468
（モウノカイ　ダイヒョウ　モリケンジ）
●びわこ銀行 長浜支店 普通　721691
（モウノカイ　ダイヒョウ　モリケンジ）

※記事中での写真・本文につきましては、無断転載を禁じます。